古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』における聖書からの引用 *

佐藤　昭裕

序．はじめに

12 世紀初めのロシアで成立した年代記『過ぎし年月の物語』は、9 世紀から 12 世紀にかけてリューリクの子孫たちが周辺の諸民族と戦い、あるいは自分たちの間で互いに攻防を繰り返して、次第にキエフを中心とする古代ロシア統一国家を築き上げていく過程を描いた歴史物語である。歴史上の出来事が年ごとの記録として記され、節目の大きな事件、キエフ大公を初めとする公たちの死や戦争、他民族による侵攻などに際しては、事件の具体的な記述が終わったあとで、年代記作者によるキリスト教的立場からのコメントが行われる。そしてこのコメント部分では、年代記作者の主張を裏付けるために聖書からの引用が多く行われる[1)]。

筆者はかつて、この出来事の記録の部分とコメント部分の言語的な差異について、語順や指示代名詞 sь「この（近称）」と onь「かの（遠称）」の使用の違いにもとづいて、前者は特別の語りのスタイルで語られ、後者は日常の話し言葉により近い言語で記されているという観察を示した[2)]。コメント部分は聖書からの引用が多く、語彙的にみれば全体として従来から言われている通り古教会スラブ語の影響を色濃く受けているが、引用

---

* 本稿は 2003 年 7 月 5 日に行われた COE 第 31 研究会の第 5 回研究会における筆者の同名の口頭発表および 2003 年 8 月にリュブリアナで開かれた第 13 回国際スラビスト会議における口頭発表 “Citaty iz Biblii v «Povesti vremennych let».” の内容を改訂するとともに、旧約聖書からの引用についてスラブ語訳聖書のデータを補ったものである。cf. Sato (2003)

1）Sielicki (1984)を参照。最近では「イパーチー年代記」における聖書からの引用を扱った Mouchard (2003) がある。

2）cf. 佐藤(1992), Sato (1993).

を除いた部分、すなわち年代記作者自身の筆になる部分は、むしろ当時の話し言葉に近い言語で書かれているというのが筆者の主張であった。しかしこの議論に際して筆者は、聖書からの引用部分そのものについては、聖書原典に極めて忠実な、いわば人工的テクストである可能性があるとして分析の対象から外すに止めた。そこで本稿では、今一度この問題に立ちかえり、『過ぎし年月の物語』中に見られる聖書からの直接的な引用について考えてみたい。

年代記作者によるコメントは、主要な登場人物個人について、とくにその死について行われる場合（955 年「オリガの洗礼」、969 年「オリガの死」、980 年「改宗前のヴラヂミル・スヴャトスラヴィチの生活」、996 年「改宗後のヴラヂミルの生活」、1015 年「ヴラヂミルの死」、同年「ボリスとグレブの殺害」、1019 年「呪われし者スヴャトポルクの死[3)]」、1078 年「イジャスラフ・ヤロスラヴィチの死」等について）と、個人ではなくルシ全体の運命に関わる出来事について行われる場合（988 年「ルシの洗礼」、1068 年「ポロフツィの侵攻」、1093 年「ポロフツィの侵攻」、1096 年「ポロフツィの侵攻」等について）がある。いずれも聖書からの引用を含む。

そしていま一つの引用のタイプとして、聖書からの引用そのもの、聖書の内容の提示が記述の主要な目的となっている場合がある。986 年の記事でグレキから遣わされた哲学者がヴラヂミル・スヴャトスラヴィチにキリスト教の信仰の基本的な考えを説く場面、いわゆる Reč filosofa「哲学者の言葉」の中でとくに旧約の預言書からの引用が行われる部分

3）シャフマトフによれば「スヴャトポルクの死」についてのコメントの始めの部分はビザンツの史家ゲオルギオス・ハマルトーロスの年代記から取られたとされるが、創世記からの引用は年代記作者自身によって行われたと考えられる。cf. Šachmatov (1940: 57).

4）本稿では議論の対象から外すが、「ラヴレンチー年代記」1096 年の通常の記事の後に挿入された「モノマフの教訓」「モノマフの手紙」にも聖書本文からの引用が多く見られる。また、このような狭い意味での引用の他に、『過ぎし年月の物語』冒頭「年代確定以前」の記事に見られる旧約聖書の要約がある。これはシャフマトフによれば、ハマルトーロスの年代記に遡るとされる。cf. Šachmatov (1940: 42-45, 60, 72-77). また本文中で触れた«Reč filosofa»では旧約の預言の他に、旧約の歴史と新約の出来事が語られ、さらに神学的な説明が行われるが、これらは聖書本文の直接的な引用ではないので、本稿の議論からは外す。なお、この旧約の歴史の部分も、シャフマトフによればハマルトーロスの年代記に遡るとされる。cf. Šachmatov (1940: 148-149).

である[4)]。

一方引用される聖書本文については、スラブ語訳のテクストのタイプを考慮し、「福音書」「使徒書簡」「詩篇」「詩篇以外の旧約聖書」に分けて議論することが有用であろう。さらに「詩篇以外の旧約聖書」からの引用については、Šachmatov (1940) で指摘された Parimejnik 起源のものとそうでないものを区別して考える必要がある[5)]。

以下では、まず議論の出発点として第 1 章で、年代記中で聖書テクストが本当に正確に、逐語的に引用されているのかどうかを確かめる。その上で第 2 章では、引用の基本的なタイプについて調べる。さらに第 3 章では、年代記作者が読者に訴えかけるために用いた様々な技術について考える。そして第 4 章では、世俗の信仰者としてのヴラジミル・モノマフの聖書の知識について述べる。第 5 章では全体をまとめる。

1．引用されるべき正確なテクストの存在

まず、年代記中に見られる聖書からの引用部分が、オリジナルのギリシア語テクスト、すなわち『70 人訳聖書』およびギリシア語『新約聖書』に対してどの程度忠実に訳されているのか、またスラブ語訳聖書テクストの本文とどの程度一致しているのかを見る。「福音書」「使徒書簡」「詩篇」「詩篇以外の旧約聖書」に分けて、語と語の対応、語順の一致、文法範疇の一致といった点について、引用テクストとギリシア語原典およびスラブ語訳聖書の関係を観察する。

まず福音書の場合を見る。次は 996 年の記事でヴラジミルの信仰生活について述べた箇所、彼がキエフの町で聖書の言葉が読まれるのを耳にする場面である。「聖書の言葉が読まれる」という記述は、実際に聖書の翻訳テクストがあって、それが音読されていることを示している。

5）Parimejnik は主として旧約の抜粋からなる典礼書である。ノヴゴロドの大主教ゲンナーヂーにより、ロシアで初めて旧新約聖書の全巻が纏められたのは 1499 年のことであり、それ以前に成立した『過ぎし年月の物語』の作者はこの Parimejnik から旧約聖書の多くの部分を引用したと考えられる。cf. Šachmatov (1940: 38). 本稿では 12 世紀末～ 13 世紀初めにブルガリアで成立したとされる Grigorovičev Parimejnik を参照した。cf. Brandъ (1894-1901, vyp.1: i-ii). 引用は Ribarova i Chauptova (1998) による。

そして事実、この引用はギリシア語原典の完全な逐語訳であり、古教会スラブ語訳福音書とも完全に一致している[6)]。

6）『過ぎし年月の物語』からの引用はカールスキー校訂 *Lavrent'evskaja letopis',* vyp.1: *Povest' vremennych let, Polnoe sobranie Russkich letopisej,* t.1. izd.2. 1926.によった。ローマ字転写に当たっては若干の簡略化を行った: ω → o, ϵ → e, oy → u, θ → f, ï → i, ı → i. titlo による省略部分は丸括弧（ ）を用いて補う。数字はアラビア数字に直し、人名はすべて大文字で始める。引用箇所はコラム番号と行で示す。

古ロシア語テクストにおける聖書本文からの引用とその日本語訳の該当部分は « » および『 』で囲んで示す。ギリシア語『新約聖書』および『70 人訳聖書』と並んで、古教会スラブ語訳あるいは教会スラブ語の旧新約聖書のテクストを併記する。古ロシア語テクストとギリシア語原典が語順、文法形式も含めて逐語的に対応する部分は太字イタリックで示す。ほぼ対応するものの、語順が異なる場合は通常のイタリックと下線で示す。また文法的あるいは語彙的にずれがある部分は通常のイタリックと下波線で示す。日本語の訳文は、逐語的対応の部分はゴチックで、語順が異なる部分は下線で、文法的あるいは語彙的ずれがある部分は下波線で示した。また、ギリシア語原典と古ロシア語テクストで文法範疇に違いがある場合は、括弧内に示す。聖書本文の年代記作者による省略は [---] によって示す。本稿筆者がスペース等の理由で年代記テクスト等を省略して引用する場合は […] という符号を用いて区別した。『70 人訳聖書』の詩篇等における節の途中の行替えは // で示す。またスラブ語訳の聖書テクストでは、年代記テクストと一致する部分を通常のイタリックにし、年代記テクストと語順が違っていたり語彙や文法形式が異なる部分を太字のイタリックで示した。

出典、引用箇所を示すためには次の略号を用いる。*Mar.*: Codex Marianus, *Zogr.*: Codex Zographensis, *Grig.Parim.*: Ribarova i Chauptova 校訂 Grigorovičev Parimejnik, *LXX*: 『70 人訳聖書』, *Ostrož*: 1581 年刊 Ostrožskaja Biblia、*Ps.Sin.*: Psalterium Sinaiticum, *Tolk.Apost.1220.*: Voskresenkij 校訂 1220 年版 Apostol、*Tolst.Apost.XIV.*: Voskresenkij 校訂トルストイ旧蔵の 14 世紀 Apostol. Am.:「アモス書」、I Cor.: 「コリント人への第 1 の手紙」、Dan.:「ダニエル書」、Ier.:「エレミヤ書」、 Is.:「イザヤ書」、Jn.:「ヨハネによる福音書」、Mt.:「マタイによる福音書」、Mc.:「マルコによる福音書」、Lc.:「ルカによる福音書」、Leui.:「レビ記」、Pro.:「箴言」、Ps.:「詩篇」、Rom.:「ローマ人への手紙」、Zach.:「ザカリア書」。旧約聖書の章と節は『70 人訳聖書』により、日本語の聖書と異なる場合は、古ロシア語テクストの部分に Ps.95.1 (96.1) のような形で日本語訳聖書の章と節の番号を（ ）に入れて併記した。古ロシア語テクストの異本は R.: ラヂヴィル年代記、A.: アカデミー写本である。文法形式については次の略語を用いる。aor.: aorist, impf.: imperfect, Imper.: imperative, pf.: perfect, pr.: present.

1）slyša bo jedinoju eua(n)g(e)lьe čtomo. «Mt.5.7 ***bl(a)ž(e)ni m(i)l(o)st(i)vii jako ti pomilovani budet***[7].»[125-15]
（彼は）ある時福音書が読まれて『Mt.5.7 **あわれみ深い人は幸いである。彼らはあわれみを受けるであろう。**』…というのを聞いた。
Mt.5.7 ***μακάριοι οἱ ἐλεήμονες, ὅτι αὐτοὶ ἐλεηθήσονται.***
Zogr. Mt.5.7 *blaženi milostivii. ěko ti pomilovani* ***bądątъ.***

次は使徒書簡の例である。988 年の「ルシの洗礼」に際してのコメント中に見られる。ギリシア語原典の冒頭の ἢ ἀγνοεῖτε ὅτι「それとも、あなたがたは知らないのか」の部分が落ち、代わりに bratja「兄弟たちよ」という呼びかけの言葉が挿入されていること、εἰς Χριστὸν Ἰησοῦν「キリスト・イエスに」が vъ Isus Christa「イエス・キリストに」となって語順が変わっていること以外は、きわめて忠実な逐語訳である。スラブ語訳の Apostol と比べても大きな違いはない。1 人称複数 ἐβαπτίσθημεν「（我々は）洗礼を受けた」が 3 人称単数 krьstisę「（彼は）洗礼を受けた」で現れるのは、スラブ語とギリシア語の文法構造の違い、すなわちギリシア語の相関的な関係詞 ὅσοι “as much as, all who” が eliko nas「我々のうちで…する限りのものは」という数量詞を用いた表現で訳されていることによるものである[8]。

2）Pavelъ gl(agol)etъ. «Rom.6.3 bratja ***eliko nas kr(e)stisę vъ Is(u)s Ch(ri)s(t)a. vъ sm(e)rti jego kr(e)stichomъsę*** 6.4 i ***pogrebochomsę ubo s nimъ. kr(e)št(e)nьemъ vъ sm(e)rtъ. da jakože vъsta Ch(ri)s(to)s ot mertvych sъ slavoju o(t)čeju. jakože i my vъ obnovlenьi žitьja poidemъ.»”*** [120-12]
パウロが、兄弟たちよ、『Rom. 6.3 イエス・キリストの名において**私たちが洗礼を受けたのは、彼の死において洗礼を受けたことなのであり、**6.4 **また彼の死における洗礼によって彼と共に葬られたことなのである。またキリストが死んだ者たちの中から父の栄光と共に蘇られたように、私たちもまた新しい生命へと歩んでいく**

7）異本 R. A.: budutъ
8）この点についてみると、この例の古ロシア語のテクストは最も古い *Tolk.Apost.1220.* よりも 14 世紀の *Tolst.Apost.* の方により近い。

のである』と言っている。

Rom. 6.3 ἢ ἀγνοεῖτε ὅτι ***ὅσοι ἐβαπτίσθημεν εἰς*** <u>*Χριστὸν Ἰησοῦν*</u> ***εἰς τὸν θάνατον αὐτοῦ ἐβαπτίσθημεν;*** 6.4 ***συνετάφημεν οὖν αὐτῷ διὰ τοῦ βαπτίσματος εἰσ τὸν θάνατον, ἵνα ὥσπερ ἠγέρθη Χριστὸς ἐκ νεκρῶν διὰ τῆς δόξης τοῦ πατρός, οὕτως καὶ ἡμεῖς ἐν καινότητι ζωῆς περιπατήσωμεν.***

Tolk.Apost.1220. Rom.6.3 Ili ne razumějete. jako *jeliko* ***kr(ь)stichomъsę*** *vъ* ***ch(rist)a is(us)a.*** *vъ s(ъ)mr(ъ)tь jego kr(ьs)tichomъsę.* 6.4 *pogrebochomъsę ubo s nimь krьštenijemь vъ s(ъ)mr(ъ)tь. da jakože* ***ch(risto)sъ vъsta iz*** *mьrtvyichъ* ***slavoju*** *o(t)čeju.* ***tako*** *i my vъ obnovlenije* ***žizni choditi načnemъ.***

Tolst.Apost. Rom.6.3 Ili ne raz měete[9]. jako *eliko nasъ kr(ь)stisę vъ* ***ch(ri)s(t)a is(u)sa.*** *vъ s(ъ)mr(ъ)tь ego kr(ь)stichomъsę.* 6.4 *pogrebochomъsę ubo s nimь kr(ь)št(e)niemь vъ s(ъ)mr(ъ)tь. da jakože vъsta ch(risto)sь ot mr(ъ)tvych* ***slavoju*** *o(t)čeju* ***takože*** *i my vъ obnovlenie žitija poidemъ.*

詩篇の例を見てみよう。同じく 988 年の「ルシの洗礼」のコメント部分である。ギリシア語の ἔθνεσιν**「民族、異邦人」と** λαοῖς**「人々、国民」が古ロシア語では訳し分けられず、一つの言葉** vo jazyčěch**「民、民族、異教徒」で訳されている点を除けば、これも完全な逐語訳であり、シナイ詩篇との違いも語彙的なものに止まっている。**

3) i paky rcěmъ sъ D(a)v(y)d(o)mь. «Ps.95.1 (96.1) [---] ***vъspoite G(o)s(podo)vi pěs(nь) novu. // vospoite G(o)s(podo)vi vsę zemlę.*** 95.2 (96.2) ***vospoite G(o)s(podo)vi bl(a)g(o)s(lo)v(i)te imę jego. // bl(a)g(o)s(lovi)te d(e)nь ot dne sъpasenьja jego.*** 95.3 (96.3) ***vъzvěstite vo*** <u>*jazyčěch*</u> ***slavu jego. // vъ vsěch*** <u>*jazyčěch*</u> ***čjudesa jego.*** 95.4 (96.4) ***jako velii G(o)s(pod)ь i chvalenъ zělo.*** [---]» [119-27]

そして私たちは再びダヴィデとともに『Ps.95.1(96.1) [---] **主に新**

9）raz měete となっているが、正しくは razuměete.

しい歌をうたいなさい。// あなたがた国民のすべてが主に誉め歌をうたいなさい。95.2 **彼の名を祝福しなさい。彼の救いを日々に言い広めなさい。**95.3 **彼の栄光を**諸々の民族の中に**言い広めなさい。// すべての民族の中に彼の奇跡を（言い広めなさい）。**95.4 **主は偉大であり、大いに讃えられ**[---]、』[…]と言おう。

Ps.95.1 Ὅτε ὁ οἶκος ᾠκοδομεῖτο μετὰ τὴν αἰχμαλωσίαν. ᾠδὴ τῷ Δαυιδ. // ***Ἄισατε τῷ κυρίῳ ᾆσμα καινόν, // ᾄσατε τῷ κυρίῳ, πᾶσα ἡ γῆ.*** 95.2 ***ᾄσατε τῷ κυρίῳ, εὐλογήσατε τὸ ὄνομα αὐτοῦ, // εὐαγγελίζεσθε ἡμέραν ἐξ ἡμέρας τὸ σωτήριον αὐτοῦ.*** // 95.3 ***ἀναγγείλατε ἐν τοῖς ἔθνεσιν τὴν δόξαν αὐτοῦ, // ἐν πᾶσι τοῖς λαοῖς τὰ θαυμάσια αὐτοῦ.*** 95.4 ***ὅτι μέγας κύριος καὶ αἰνετὸς σφόδρα, //*** φοβερός ἐστιν ἐπὶ πάντας τοὺς θεούς.

Ps.Sin. 95.1 EGDA CHRAMI ZЪDAŠĘ SJĚ PLĚNNIJU PЬS(A)LMЬ DAV(YD)Ь // *Vъspoite g(ospod)ju pěsnь novą. // Vъspoite g(ospod)ju vьsję zemlję. 95.2 Vuspoite g(ospod)ju* i *bl(agoslovi)te imję ego. // bl(agoslovi)te denь oto dьni sp(ase)ni-e-go* 95.3 *Vuzvěstite vъ jęzičěchъ slavą ego // Vъ vьsěchъ* ***dělěchъ*** *čjudesa ego*. 95.4 *Ěko* ***b(og)ъ*** *velei i chvalenъ dzělo.* // strašenъ estъ nado vьsěmi b(o)gy.

次は詩篇以外の旧約聖書の例である。955 年の記事で、母オリガに従おうとせず、キリスト教の信仰を受け入れることを拒むスヴャトスラフ・イゴレヴィチについてのコメント中に現れる「箴言」からの引用である[10]。ギリシア語聖書と完全に一致し、語順も含めてスラブ語訳聖書よりさらに忠実なテクストを示している。

4）«Pro.1.29 ***vъznenaviděša bo pr(e)m(u)dr(o)stь. a stracha G(o)s(pod)nę ne izvoliša***. 1.30 ***ni chotęchu moichъ vnimati světъ. // podražachu že moi obličenьja.***»[63-17]

『Pro.1.29 **彼らは知恵を憎み、主を恐れることを選ばず、**1.30 **私の忠告を聞こうともせず、// 私の非難を嘲っていたのである。**』

Pro.1.29 ***ἐμίσησαν γὰρ σοφίαν, τὸν δὲ φόβον τοῦ κυρίου οὐ***

10）シャフマトフによって Parimejnik 起源とされている。

προείλαντο 1.30 ***οὐδὲ ἤθελον ἐμαῖς προσέχειν βουλαῖς, // ἐμυκτήριζον δὲ ἐμοὺς ἐλέγχους.***
Grig.Parim. Pro.1.29 *vъznenaviděšą bo prjamądrostъ. a strach g(ospo)dně ne izvolišą.* 1.30 *ni chotěchą* ***vnimati moichъ*** *svjatъ. // podražachą že moě obyčeniě*[11].

いまひとつ詩篇以外の旧約聖書の例を挙げる。986 年の「哲学者の言葉」中の預言の部分からである [12]。ここでは、*LXX* 冒頭の καὶ が脱落し、一方最後の部分にギリシア語テクストには存在しない našego「我々の」が付け加えられている。従って完璧な逐語訳とは言えないが、ほぼ原テクストに忠実な訳であると言えよう [13]。

5) to že Isaija gl(agole)tь «Isa.52.10 ***otkryetь G(o)s(pod)ь myščju svoju s(vja)tuju. predo vsěmi jazyki i uzrętь vsi konci zemlę sp(a)s(e)nьe ot B(og)a*** našego.»[99-24]
同じくイザヤは『Isa.52.19 **主はその聖なる腕をすべての国民の前に顕わされ、地のすべての果ては私たちの神よりの救いを見るであろう。**』と言っています。
Isa.52.10 καὶ ***ἀποκαλύψει κύριος τὸν βραχίονα αὐτοῦ τὸν ἅγιον ἐνώπιον πάντων τῶν ἐθνῶν, καὶ ὄψονται πάντα τὰ ἄκρα τῆς γῆς τὴν σωτηρίαν τὴν παρὰ τοῦ θεοῦ.***
Ostrož. Isa.52.10 i ***javitъ*** *g(ospod)ь myšču svoju s(vja)tuju pred vsěmi* ***stranami****. i uzrętь vsi* ***jazycy*** *sp(a)senie b(og)a našego.*

以上、いずれの場合も、年代記中に見られる聖書からの引用は、ギリシア語原典に極めて忠実な翻訳であり、かつ古教会スラブ語訳の聖書本文とも基本的に同じ形を示していることが分かる。このことは、年代記作者がスラブ語訳の聖書本文を手許におき、そこから引用を行ったこと

11）Lobkovskij parimejnik (1294-1320), Zachar'inskij parimejnik (1271)では正しく obličenija の形が現れる。
12）Parimejnik にはこの個所は見られないが、参考のため Ostrožskaja Biblia から該当個所を示す。
13）ギリシア語の αὐτοῦ「彼の」が所有代名詞再帰形 svoju「自分の」で現れているが、これは二つの言語の構造上の違いによるものである。

を示している。

2．引用の基本的タイプ

2. 1. 省略の方法

上で見たとおり、『過ぎし年月の物語』の作者は手元にスラブ語訳の聖書を持ち、それを参照する環境にあったと考えられる。しかし引用テクストの実際の現れ方を見ると、テクストとして顕在する部分はギリシア語原典に極めて忠実である一方、必ずしもギリシア語テクストの全体が引用されているわけではなく、むしろ、その一部だけが引用されている場合の方が多いことが分かる。

次は 988 年の「ルシの洗礼」のコメントで引用された使徒書簡の例である。実際に現れている部分だけを見れば、ギリシア語の γὰρ が脱落している点を除きほぼ完璧な逐語訳であるが、11 節の前半と最後の部分、そして 12 節の後半が省略されている。一方で、引用された古ロシア語のテクストを読むと、聖書のこの箇所を暗記している人でなければ省略があることに気づかないほどに、完全に文意の通った文章になっている[14]。

6）«Rom.13.11 [---] ***nyně*** [---] ***približisę nam sp(a)s(e)nьe***. [---] 13.12. ***noštь uspě a d(e)nь približisę***. [---]» [120-18]

『Rom.13.11 [---] **今や** [---] **私たちに救いが近づいた。**[---] 13.12. **夜が過ぎて、昼が近づいた。**[---]』

Rom.13.11 Καὶ τοῦτο εἰδότες τὸν καιρόν, ὅτι ὥρα ἤδη ὑμᾶς ἐξ ὕπνου ἐγερθῆναι, **νῦν** γὰρ ***ἐγγύτερον ἡμῶν ἡ σωτηρία*** ἢ ὅτε ἐπιστεύσαμεν. 13.12 ***ἡ νὺξ προέκοψεν, ἡ δὲ ἡμέρα ἤγγικεν.*** ἀποθώμεθα οὖν τὰ ἔργα τοῦ σκότους, ἐνδυσώμεθα [δὲ] τὰ ὅπλα τοῦ φωτός.

Tolk.Apost.1220. Rom.13.11 I se vědušte vrěmę. jako časъ ubo

14）スラブ語訳 Apostol について見ると、上の例 2）の場合とは異なり、*Tolst.Apost.*も同じ形を示す。cf. *Tolst.Apost.* Rom.13.11 […]. *Nynę* bo ***bliže*** *namъ sp(a)s(e)nije*. […] 13.12 *noštь uspě. a d(ь)nь približisę*. […].

vamъ otъ sna vъstati. *Nyně* ***bliže*** *namъ sp(a)senije.* ili jegda věrovachomъ. 13.12 *noštь uspě. a d(ь)nь približisę.* otъvьrzěmъ ubo děla tьmnaja. oblecěmъsę vъ oružije světa.

次は 1015 年の「ボリスの殺害」の物語で死を前にしたボリスが朝の祈りで六聖歌[15]を歌う場面からの引用である[16]。ここでは「詩篇」37.3 (38.2)の後半が省略され、というより 37.3 の後半から 37.17 にいたるまでがまるまる省略され、また 37.18 も最後の部分が省略されている。しかし引用されている部分は、ギリシア語の μοι「与格」が vo mně「vъ＋前置格」で訳されている以外完璧な逐語訳であり、この点を除けばシナイ詩篇ともほぼ一致している。

7) i paky «Ps.37.3 (38.2) ***jako strěly tvoja unьzoša*** vo mně. [---] 37.18 (38.17) ***jako azъ na rany gotovъ.*** // i bolěznь moja predo mnoju estь [---]». [138-9]

また『Ps.37.3 **あなたの矢が私に突き刺さりました**。[---] 37.18 **私は傷を受ける覚悟があります。// 私の痛みが私の前にあります**[---]。』と（言った）。

Ps.37.3 ***ὅτι τα βέλη σου ἐνεπάγησάν*** *μοι,* // και ἐπεστήρισας επ' ἐμὲ τὴν χεῖρά σου. 37.18 ***ὅτι ἐγὼ εἰς μάστιγας ἕτοιμος,*** // καὶ ἡ ἀλγηδών μου ἐνώπιόν μου διὰ παντός.

Ps.Sin.37.3 Ěko strěly tvoję unьzą ***mně:*** // I utvrъdilъ esi na mьně rąką tvoją: 37.18 *Ěko azъ na rany gotovy: // I bolěznъ moě prědъ mnoją estъ* vyiną.

続いて引用される 142.1-3 も示されている部分は完璧な逐語訳である。142.2 の σου「あなたの」が再帰代名詞所有形造格形 svoim「自分の」で訳されているのはスラブ語の構造上の問題である[17]。

15）Šestopsalmie, ἑξαψάλμα. 詩篇 3 篇, 37 (38) 篇, 62(63) 篇, 87 (88) 篇, 102 (103) 篇, 142(143) 篇からなり、六聖誦とも訳される。
16）詩篇 3 篇もこの直前の文脈で引用されている。
17）R.と A.では所有代名詞 2 人称単数造格形 tvoimъ「汝の」が現れる。

8) i paky gl(agola)še «Ps.142.1 (143.1) [---] ***G(o)s(pod)i uslyši m(o)l(i)tvu moju***. [---] 142.2 (143.2) ***i ne vnidi v sudъ s rabomъ svoimъ. // jako ne opravditsę predъ toboju vsękъ živyi.*** 142.3 (143.3) ***jako pogna vragъ d(u)šju moju***. [---]» [133-11]
また彼は『«Ps.142.1 (143.1) [---] **主よ、私の祈りを聞き届けて下さい。**[---] 142.2 (143.2) **あなたのしもべを裁きにかけないで下さい。** // **すべての生けるものは、あなたの前に義とされないからです。** 142.3 (143.3) **敵は私の魂を攻めました。**[---]』と言った。
Ps.142.1 Ψαλμὸς τῷ Δαυιδ, ὅτε αὐτὸν ὁ υἱὸς καταδιώκει. // ***Κύριε, εἰσάκουσον τῆς προσευχῆς μου,*** // ἐνώτισαι τὴν δέησίν μου ἐν τῇ ἀληθείᾳ σου, // ἐπακουσόν μου ἐν τῇ δικαιοσύνῃ σου. 142.2 ***καὶ μὴ εἰσέλθῃς εἰσ κρίσιν μετὰ τοῦ δούλου σου, // ὅτι οὐ δικαιωθήσεται ἐνώπιόν σου πᾶς ζῶν.*** 142.3 ***ὅτι κατεδιώξεν ὁ ἐχθρὸς τὴν ψυχήν μου,*** // ἐταπείνωσεν εἰς γῆν τὴν ζωήν μου, // ἐκάθισέν με ἐν σκοτεινοῖς ὡς νεκροὺς αἰῶνος.
Ostrož.[18] Ps.142.1 Ps(a)lom d(a)v(y)dovъ, egda gonęšei Avesalomъ s(y)nъ ego, // 142. *G(ospod)i uslyši m(o)l(i)tbu moju*, // vъnuši molenie moe vъ istině tvoej. // uslyši mę vpravdě tvoej, 142.2 *i ne vnidi vъ sudъ s rabomъ tvoimъ*, // *jako ne opravditsę pred toboju vsękъ živyi*, 142.3 *jako pogna vragъ d(u)šju moju*, // smirilъ estъ v zemli životъ moi. // Posadilъ mę estъ v temnych jako mertvya věku.

実際にはボリスは詩篇の言葉を省略することなく正確に読誦していたはずである。省略を行ったのは年代記作者である。その際、年代記作者は、実際に引用された部分だけ読んでもきちんと筋が通るよう配慮しつつ、きわめて巧みに抜き出して引用したと考えられる。

詩篇以外の旧約からの引用の例も見よう。次は 1093 年の「ポロフツィのルシ侵攻」に対する年代記作者のコメントの一節、「レビ記」26 章からの引用である[19]。17、19、20 節は、実際に現れている部分は忠実な逐語訳になっている。33 節も最後の部分の語順の変更、また αἱ

18）*Ps.Sin.*では第 137(138)篇以降が欠けている。参考のため *Ostrož.*を示す。
19）Šachmatov (1940) によれば Parimejnik からの引用とされるが *Grig.Parim.* には該当個所が欠けているので、参考のため *Ostrož*を示す。

πόλεις「町々」を dvori「家々」と訳してある点を除けば、実際に引用されている部分はすべて忠実な訳である[20]。

9) [sotvori bo sę. plačь velikъ. v] zemli vašei[21]. opustěša sela naša i gorodi naši. bychom běgajuči pred vragy našimi. jakož(e) pr(o)r(o)kъ gl(agola)še

«Leui.26.17 [---] ***padete pred vragy vašimi. poženutь vy nenavidęštii vas. i poběgnete nikomu ženuštju vas.*** 26.18 [---] 26.19 [---] ***skrušju ruganьe gordyni vašeja.*** [---] 26.20 ***i budetь v tštetu krěpostь vaša.*** [---] 26.33 [---] ***ubьetь vy prichodę v města***[22]. ***[i] budetь zemlę vaša pusta. i*** dvori ***vaši*** pusti. budut 26.23? jako vy chudi este i lukavi. 26.24. i azъ poidu ***k vamъ jarostьju lukavoju.***» [222-20]

我々の国［に大きな悲しみが起り」、我々の村、我々の町は荒れ果て、我々は敵の前で逃げまわったのである。『Leui.26.17 [---] **あなたがたはその敵に殺されるであろう。あなたがたを憎む者があなたがたを迫害するであろう。あなたがたは追う者もないのに逃げるであろう。**26.18 [---] 26.19 [---] **私はあなたがたの誇りとする力を砕こう。**[---] 26.20 **あなたがたの力は無駄に費やされるであろう。**[---] 26.33 [---]**剣は来てあなたがたを打ち滅ぼすであろう。あなたがたの地はその産物を出さず、あなたがたの**家々は住む人がなくなる**であろう。**26.23? あなたがたがなお邪悪でずるいならば、26.24 私もまた**あなたがたに邪悪な怒りをもって**逆らうであろう』と預言者が言っていたとおりである。

Leui.26.17 καὶ ἐπιστήσω τὸ πρόσωπόν μου ἐφ' ὑμᾶς, καὶ ***πεσεῖσθε ἐναντίον τῶν ἐχθρῶν ὑμῶν, καὶ διώξονται ὑμᾶς οἱ μισοῦντες ὑμᾶς, καὶ φεύξεστθε οὐθένος διώκοντος ὑμᾶς.*** 26.18 καὶ ἐὰν ἕως τούτου μὴ ὑπακούσητέ μου, καὶ προσθήσω τοῦ παιδεῦσαι ὑμᾶς ἑπτάκις

20）この箇所について Šachmatov (1916: 280) は「Leu XXVI.17, 19, 20, 33, 23, 24, 27, 28 (?)」としている。また Šachmatov (1940) では 33 節に後続する部分を 23 節としている。しかし、23 節が翻訳引用されているという見解には同意できない。また 27 節、28 節についても実際に引用されているとは考えられない。

21）R.A.では našei となっている。

22）R.A.に従って mečь と読む。

ἐπὶ ταῖς ἁμαρτίαις ὑμῶν 26.19 καὶ ***συντρίψω τὴν ὕβριν τῆς ὑπερηφανίας ὑμῶν*** καὶ θήσω τὸν οὐρανὸν ὑμῖν σιδηροῦν καὶ τὴν γῆν ὑμῶν ὡσεὶ χαλκῆν, 26.20 ***καὶ ἔσται εἰς κενὸν ἡ ισχὺς ὑμῶν,*** *καὶ οὐ δώσει ἡ γῆ ὑμῶν τὸν σπόρον αὐτῆς,* καὶ τὸ ξύλον τοῦ ἀγροῦ ὑμῶν οὐ δώσει τὸν καρπὸν αὐτοῦ. 26.33 καὶ διασπερῶ ὑμᾶς εἰσ τὰ ἔθνη, καὶ ***ἐξαναλώσει ὑμᾶς ἐπιπορευομένη ἡ μάχαιρα. καὶ ἔσται ἡ γῆ ὑμῶν ἔρημος, καὶ*** <u>αἱ πόλεις</u> ***ὑμῶν*** <u>*ἔσονται ἔρημοι.*</u> 26.23 καὶ ἐπὶ τούτοις ἐὰν μὴ παιδευθῆτε, αλλὰ πορεύησθε πρὸς με πλάγιοι, 26.24 <u>*πορεύσομαι κἀγὼ*</u> ***μεθ' ὑμῶν θυμῷ πλαγίῳ*** καὶ πατάξω ὑμᾶς κἀγὼ ἑπτάκις ἀντὶ τῶν ἁμαρτιῶν ὑμῶν.

Ostrož. Leui 26.17 i opru lice moe na vas, i *padete pred vragi vašimi,* i *poženutъ vy nenavidęštii vasъ, i proběgnete* ***negonimi nikimže.*** 26.18 I ašte dosego neposlušaete mene, i priložu nakazati vy vredъ 7. za grěchi vaša, 26.19 i *sъkrušu* ***ukorinu prezora vašego***, i položu n(e)bo vamъ aki želězno i zemlju vašu aki mědęnu. 26.20 *I budetъ vъ tšte krěpostь vaša*, i ne dastъ zemlę vaša sěmeni svoego, i dreva sela vašego ne dadut ploda svoego. 26.33 i razsypalju vy vъ jazykli i ***potrebitъ*** *vy prichodęi mečemъ, i budetъ zemlę vaša pusta, i* ***gradi*** *vaši* ***budutъ pusty***. 26.23 i ašte simъ ne nakažetesę, no poidete kъ mně v nepravdě, 26.24 *i poidu i azъ protivu vamъ vo jarosti* moei sъ rveniem i pogublju vy azъ sedmiždy grěchъ radi vašich.

以上、新約と旧約の両方から、実際に引用されている部分は極めて忠実な逐語訳である一方、かなりの部分が省略されている場合の例を観察した。ここで注目すべきことは、年代記作者が大胆な省略を行いながらも、実際に抜き出した部分のテクストについては殆ど改変することなく、これを巧みにつなぎ合わせて、きちんと意味の通る、いわば「新しい」テクストを作っているという点である。このことも、彼らが実際にスラブ語訳の聖書本文を目の前におき、十分に考えながら、そこから必要部分を選びだしていったことを示している。

2. 2. 異なるテクスト部分の接合

さらには、全く異なるテクスト部分が接合され、あたかも一つの連続した部分から引用されたかのように見える場合もある。

次は、986 年のいわゆる「哲学者の言葉」の中に見られるルシに伝道に来たとされるグレキの哲学者による新約聖書からの引用である。Šachmatov (1940) はこれを「Ｉコリント」11.24, 25 からの引用とする。

10) i preda ap(o)s(to)l(o)m priemъ chlěbъ. [r(e)če] «I Cor.11.24 ***se*** *estь tělo moe lomimoe za vy*. [---] 11.25 ***takože i čašju*** [---].» priemъ reč(e) «Mt.26.28/ Mc.14.24 ***se estь krovь moja novago zavěta.***» [86-28]

（イエスは）パンを取って使徒たちに示して言った、『I Cor.11.24 **これは**あなたたちのためにさかれた私のからだである。**同じように杯を取って**』言った、『Mt.26.28/ Mc.14.24 **これは新しい契約の私の血である。**』

［**前半部**］I Cor.11.23 […] ὅτι ὁ κύριος Ἰησοῦς […] ἔλαβεν ἄρτον. 11.24 καὶ εὐχαριστήσας ἔκλασεν καὶ εἶπεν, ***Τοῦτό*** *μού ἐστιν τὸ σῶμα τὸ ὑπὲρ ὑμῶν κλώμενον* [23]. […]. 11.25 ***ὡσαύτως καὶ τὸ ποτήριον*** μετὰ τὸ δειπνῆσαι, λέγων, τοῦτο τὸ ποτήριον ἡ καινὴ διαθήκη ἐστὶν ἐν τῷ ἐμῷ αἵματι. […] .

Tolk.Apost.1220. I Cor.11.23 […] jako g(ospod)ь is(us)ъ […] prijatъ chlěbъ. 11.24 i pochvalь prělomi i reče. priiměte i jadite. *se jestь tělo moje lomimoje za vy*.[…]. 11.25 *Takože i* po večeri gl(agol)ę[24]. si čaša novyi zavětъ jestь o mojej krъvi. […].

［**後半部**］Mt.26.28 ***τοῦτο*** γάρ ***ἐστιν τὸ αἵμά μου τῆς καινῆσ***[25]

23）Aland et al.**校訂** *GNT* **の本文では** κλώμενον **は現れないが、**$\aleph^{c}$ C^{3} $D^{b,c}$ G K P Ψ 81 88 104 181 326 330 436 451 614 629 630 1241 1739^{mg} 1877 1881 1962 1984 1985 2127 2492 2495 *Byz Lect* **により補った。なお** D^{gr*} **では**[…] ὑπὲρ ὑμῶν θρυπτόμενον.

24）*Tolst.Apost.***でもこの部分は** 11.25 *takože* po večeri gl(agol)ę. […]. **となって「杯」の語は欠けている。**Čudovskaja rukopis' Novogo Zaveta XIV v.**では** 11.25 *tako i čašju* po večeręnьi gl(agol)ę. […].**となって「杯」の語が入り、さらに** Biblia 1499 g.（**ゲンナーヂーの聖書**）**では** 11.25 *takožde i čašą* po večeręnii gl(agol)ę. […].**となって、年代記テクストと完全に一致する。**

25）*GNT* **本文では** καινῆσ **は現れないが、**A C D K W Δ Π 074^{vid} f^{1} f^{2} 28 565 700

διαθήκης […].
Mar. Mt.26.28 *se estъ krъvъ moě novaago zavěta.* […].
［後半部］Mc.14.24 καὶ εἶπεν αὐτοῖς, ***Τοῦτό ἐστιν τὸ αἷμά μου τὸ τῆς καινῆσ διαθήκης***[26] […].
Mar. Mc.14.24 i reče imъ *se estъ krъvъ moě novaago za*[*va*]*věta.* […].

前半部は、確かに I Cor.11.24 […] **Τοῦτό μού ἐστιν τὸ σῶμα τὸ ὑπὲρ ὑμῶν κλώμενον** […] 11.25 **ὡσαύτως καὶ τὸ ποτήριον** μετὰ τὸ δειπνῆσαι, λέγων, […] > *Tolk.Apost.1220*. I Cor.11.24 […] **se jestь tělo moje lomimoje za vy.** […] 11.25 **Takože i** po večeri gl(agol)ę.「**これはあなたがたのために割かれたわたしの体である**。 […] 晩餐のあと（**杯も**）**同じようにして言った**」となっていて、とくにスラブ語訳の Apostol は *Tolk.Apost.1220*.および *Tolst.Apost*.で何らかの理由により čašju の語が脱落したことを除けば、『過ぎし年月の物語』中の引用部分と完全に一致している。また後半部も τοῦτο τὸ ποτήριον ἡ καινὴ διαθήκη ἐστὶν ἐν τῷ ἐμῷ αἵματι > *Tolk.Apost.1220*. I Cor.11.25 […] si čaša novyi zavětъ jestъ o mojej krъvi. […]「この杯は私の血における新しい契約である」とあり、もしこの引用が連続したテクスト部分から取られたことを前提とするなら有力な候補になる。しかし後半部のテクストの構造がかなり異なることは否定できない。またシャフマトフの見解とは異なるが、「ルカ」22.19-20 も、連続したテクスト部分から取られたことを前提とするなら、同じく有力な候補となるだろう[27]。しかし、もしここで、前半部と後半部を分け、それぞれが異なる箇所から取られた可能性を許

892 1009 1010 1071 1079 1195 1216 1230 1241 1242 1253 1344 1365 1546 1646 2148 2174 *Byz Lect* により補った。

26）*GNT* 本文では τὸ αἷμά μου τῆς διαθήκης とあるが A K P Δ Π f^1 f^2 28 700 1009 1071 1079 1195 1216 1230 1241 1253 1365 1546 1646 2148 2174 *Byz Lec* にある τὸ αἷμά μου τὸ τῆς καινῆσ διαθήκης という形を採った。

27）Luk. 22.19 καὶ λαβὼν ἄρτον εὐχαριστήσας ἔκλασεν καὶ ἔδωκεν αὐτοῖς λέγων, ***Τοῦτό ἐστιν τὸ σῶμά μου*** *τὸ ὑπὲρ ὑμῶν διδόμενον*. […] 22.20 *καὶ τὸ ποτήριον ὡσαύτως* μετὰ τὸ δειπνῆσαι, λέγων, ***Τοῦτο*** *τὸ ποτήριον ἡ καινὴ διαθήκη ἐν τῷ αἵματί μου*, […] > *Mar*. Luk.22.19 i priimъ chlěbъ chvalą vьzdavъ prělomi. i dastъ imъ gl(agol)ę. ***se estъ tělo moe*** *daemoe za vy*. […] 22.20 *i čašą takožde* po večerěnii gl(agol)ę. ***si*** *čaša novy zavětъ moeją krъviją*. […]

すならば、別の見方が現れてくる。すなわち、後半部については **τοῦτο** γάρ **ἐστιν τὸ αἷμά μου τῆς καινῆσ διαθήκης** > *Mar.* **se estъ krьvь moě novaago zavěta** という表現を持つ「マタイ」26.28 あるいは **Τοῦτό ἐστιν τὸ αἷμά μου τῆς καινῆσ διαθήκης** > Mar. **se estъ krьvь moě novaago za**[va]**věta** という表現を持つ「マルコ」14.24 から取られたという考え方である[28]。そして本稿の議論で明らかになってきた、『過ぎし年月の物語』で聖書本文が引用される際、実際に引用される部分については、ギリシア語原典に忠実なテクストが示されるという観察にもとづけば、やはり前半部と後半部はそれぞれ異なる箇所から取られたと考える方が妥当であろう。

ただここで、年代記作者が自らの記憶に基づいて引用したために、結果として二つの箇所から引いてしまったという可能性は否定できない[29]。いずれにせよ、このような合成の結果できた新しい行文が、この場面で発せられ、共観福音書のそれぞれで微妙に異なって記録されているイエスの言葉を、もっとも分かりやすく述べたものとなっていることは事実である。

2. 3. 挿入付加

2.1 で見た原テクストの部分的な省略とは逆に、原典にない要素が付加されてより分かりやすい文脈が形成される場合がある。

次は、988 年の「ルシの洗礼」に対するコメントの一節である。詩篇からの引用が連続する。はじめの 94.1-2 は最後の部分が省略されているものの完璧な逐語訳の例であるが、後に続く 135.1 と 135.24 はかなり離れた部分があたかも連続する部分であるかのように引用されている[30]。

28）参考のため「マタイ」「マルコ」における前半部を示す。Mt.26.26 […] εἶπεν, Λάβετε φάγετε, *τοῦτό ἐστιν τὸ σῶμά μου*. 26.27 *καὶ λαβὼν ποτήριον* καὶ εὐχαριστήσας ἔδωκεν αὐτοῖνς […] > cf. *Mar.* Mt.26.26 […]. i reče Priiměte ědite *se estъ tělo moe*. 26.27 *i priimъ čašą* i chvalą vьzdavь. dastь imь […]; Mc.14.22 […] καὶ εἶπεν, Λάβετε, *τοῦτό ἐστιν τὸ σῶμά μου*. 14.23 *καὶ λαβὼν ποτήριον εὐχαριστήσας* ἔδωκεν αὐτοῖς, […]. > *Mar.* Mc.14.22 […] i reče. priiměte *se estъ tělo moe*. 14.23 *i priimъ čašą* chvalą vьzdavь dastь imь. […].

29）この箇所は聖書の中でいわば誰でもが知っている場面であり、年代記作者もつい確認を怠り、結果として不正確な引用をしたという可能性は否定できない。また、「マタイ」「マルコ」「ルカ」のいずれかをベースに、記憶にもとづいて不正確なテクストが作られたという可能性もある。

30）そのためにギリシア語原典の *καί*, *Ps.Sin.*の i が jako に代えられている。

そして、この最後の 135.24 で ot vragъ našich「私たちの敵から」という聖書本文からの正確な引用に加えて、これを補うために rekъše ot idolъ suetnych「すなわち空しい偶像から」という引用者による説明的な付加が行われている。この付加はごく自然に行われており、聖書本文を暗記している人でなければ、気づかないだろう。

11) reku[31] že sъ D(a)v(y)domъ. «Ps.94.1 (95.1) [---] ***priděte vъzraduemъsę G(o)s(podo)vi. // vъsklikněmъ B(o)gu i Sp(a)su našemu.*** 94.2 (95.2) ***varimъ lice jego vъ ispovědanьe.*** [---]» «Ps.135.1(136.1) ***ispovědajuštesę*** *jemu* ***jako bl(a)go // jako v věky m(i)l(o)stь jego.***» «135.24 (136.24) *jako* ***izbavil ny estь ot vragъ našich.***» rekъše ot idolъ suetnych. «[---]» [119-21]

（我々は）ダヴィデとともに言います、『Ps.94.1(95.1) [---] **来なさい、私たちは主を喜ぼう。// 神と私たちの救世主に呼びかけよう。// 懺悔において私たちは彼の顔の面前に立つ.** [---]』『Ps.135.1 [---] 彼に**信仰を告白しよう。幸いが、// 彼の慈悲が永遠にあるように**』『135.24 **私たちを私たちの敵から、**』すなわち空しい偶像から『**免れさせて下さるように**。[---]』

Ps.94.1 Αἶνος ᾠδῆς τῷ Δαυιδ. // ***Δεῦτε ἀγαλλιασώμεθα τῷ κυρίῳ, //ἀλαλάξωμεν τῷ θεῷ τῷ σωτῆρι ἡμῶν.*** 94.2 ***προφθάσωμεν τὸ πρόσωπον αὐτοῦ ἐν ἐξομολογήσει*** // καὶ ἐν ψαλμοῖς ἀλαλάξωμεν αὐτῷ. Ps.135.1 Αλληλουια. // ***'Εξομολογεῖσθε τῷ*** *κυρίῳ,* ***ὅτι χρηστός, // ὅτι εἰς τὸν αἰῶνα τὸ ἔλεος αὐτοῦ.*** // Ps.135.24 *καὶ* ***ἐλυτρώσατο ἡμᾶς ἐκ τῶν ἐχθρῶν ἡμῶν,*** // ὅτι εἰς τὸν αἰῶνα τὸ ἔλεος αὐτοῦ.

Ps.Sin. 94.1 Chvala pěnině Dav(yd)a // *Priděte vъzdraduimъsję g(ospod)ju. // Vъsklikněmъ b(og)u sp(as)u našemu.* 94.2 Varimъ lic-e-go ispovědaniimь. // i vъ pъsalъměchъ vъsklikněmъ emu. 135.1 ALELUIĚ // *Ispovědaite sję* ***g(ospodo)vi*** *ěko blagъ. // Ěko vъ věkъ milostь ego*. 135.24 ***I*** *izbavilъ nъi estь otъ vragъ našichъ. // Ěko* vъ věkъ mi.

31）R.および A.に現れる rekušte という形で読みたい。

次も同じく988年の「ルシの洗礼」に対するコメント中の引用である。全体としては一部省略を含むものの、きわめて忠実な逐語訳である。ところがここでもギリシア語原典に忠実な sětь skrušisę. i my izbavleni bychom「網の目が破れ私たちは免れたのです」に加えて ot prelьsti dьjavolę「悪魔のたぶらかしから」という説明的な語句が挿入されている。

12)«Ps.123.6 (124.6) ***bl(a)g(o)s(love)nъ G(o)s(pod)ь iže ne dastь nas // v lovitvu zubomъ ichъ***. 123.7 (124.7) [---]. ***sětь skrušisę. i my izbavleni bychom***.» ot prelьsti dьjavolę.[120-27]
『Ps.123.6 **彼らの歯によってとらえられないように // 私たちを引き渡されなかった主は、祝福されますように。**123.7 [---] **網の目が破れ、私たちは**』悪魔のたぶらかしから『**免れたのです。**』
Ps.123.6 ***εὐλογητρὸς κύριος, ὃς οὐκ ἔδωκεν ἡμᾶς // εἰς θήραν τοῖς ὀδοῦσιν αὐτῶν***. 123.7 ἡ ψυχὴ ἡμῶν ὡς στρουθίον ἐρρύσθη // ἐκ τῆς παγίδος τῶν θηρευόντων. // ***ἡ παγὶς συνετρίβη, καὶ ἡμεῖς ἐρρύσθημεν.***
Ps.Sin. 123.6 *Bl(agoslovlje)nъ g(ospod)ь: Iže ne dastъ nasъ // vъ lovitvą ząbomъ ichъ*: 123.7 D(u)ša naša ěko pьtica izbavitь sję // otь sěti lovjęštichъ: 123.8[32] *Sětь sъkrušisję i my izbavleni bychomъ.*

3．読み手に訴えかける技術

これまで見てきたように、年代記作者たちは自らの主張を裏付けるという目的にもっともふさわしい聖書の箇所を見つけ、全体をそのまま引用したり、あるいは必要な部分のみを引用するに足る聖書の知識を持っていた。また、聖書の本文に自分が作った説明の字句をそっと付け加えることもあった。さらに彼らは、引用されたテクストの新しい文脈での理解を助け、あるいは読み手であるルシの人々により強く訴えかけるために、聖書テクストに現れる字句を改変し、文法形式を修正することもあった。ここではその例を見る。

32）*Ps.Sin.*の節区分は*LXX*とずれている。

3. 1. 人称と数の調整

年代記作者は、名詞や動詞の数、人称を変えることにより、聖書に述べられた出来事や預言の内容を、読者であるルシの人々により身近なものと感じさせる技術を持っていた。

次は 988 年の「ルシの洗礼」についてのコメント中に現れる「詩篇」144.3-4 の例である。3 節に i čjudna děla tvoja「あなたの御業は不思議です」というギリシア語原典にない言葉が付け加えられていることは別として、ここで注目すべきは、ギリシア語原典の μέγας **κύριος**「**主は**偉大であり」という 3 人称の記述が年代記テクストでは velii bo **jesi**[33]「**あなた**は偉大**であり**」という 2 人称単数の表現に変えられ、さらに τῆς μεγαλωσύνης **αὐτοῦ**「**彼の**偉大さには」という記述が同じく 2 人称の所有代名詞を用いて veličьju **tvoemu**「**あなたの**偉大さには」という表現に変えられていることである。この人称の変化により、この部分は、先行する G(o)s(pod)i […] nedoumějem protivu daromъ **tvoim.** vъzdajanьja vъzdati.「主 […]よ、与えて下さった**あなたの**贈物に対して私たちは報いるすべを知りません」という神への呼びかけ、また後続の 4 節に現れる děla **tvoja**「**あなたの**御業を」という所有代名詞 2 人称単数の形に合わせて、人称と数の一貫した記述が行われることになる。それと同時に、神に対して 2 人称を用いることにより、神はルシの人々にとってより近い存在となるのである。

13) těmьže i my pripadajem k nemu gl(agol)ęšte. “G(o)s(pod)i Is(u)s Ch(ri)s(t)e čto ti vъzdamy. o vs(ě)chъ jaže vъzdastь nam. grěšnikom namъ suštemъ. nedoumějem protivu daromъ tvoim. vъzdajanьja vъzdati. «Ps.144.3 (145.3) ***velii*** bo *jesi*» i čju[d]na děla tvoja. // ***veličьju*** *tvoemu* ***něs***(***t***) ***konca***. 144.4 (145.4) ***v rodъ i rodъ vъschvalitь děla tvoja***. [---].» [119-15]

このために我々もまた彼にひざまずいて、「主なるイエス・キリストよ、私たちは罪人であるのに、私たちに与えて下さったすべてのものに対して、私たちはあなたに何を報いればよいのでしょうか。与えて下さったあなたの贈物に対して私たちは報いるすべを

33）jesi は英語の be 動詞にあたるコピュラ *byti* の現在 2 人称単数形。

知りません。『Ps.144.3 あなたは**偉大であり**、』あなたの御業は不思議であり、//あなたの**偉大さには限りがありません**。144.4 **あなたの御業を世代は世代へ引継いで讃えるでしょう**。[---]。』

Ps.144.3 ***μέγας*** *κύριος* καὶ αἰνετὸς σφόδρα, // ***καὶ τῆς μεγαλωσύνης*** *αὐτοῦ* ***οὐκ ἔστιν πέρας***. 144.4 ***γενεὰ καὶ γενεὰ ἐπαινέσει τὰ ἐργὰ σοῦ*** // καὶ τὴν δύναμίν σου ἀπαγγελοῦσιν.

Ostrož. Ps.144.3 *Velii* ***g(ospod)ь*** i chvalenъ dzělo, // *i veličiju* ***ego*** *něstь konca*. 144.4 *rodъ i rodъ vъschvalętъ děla tvoę*, // i silu tvoju vъzvěstętъ.

次も同じく、988 年の「ルシの洗礼」のコメント部分に現れる「詩篇」からの引用である。最初の 2.11 は *Ps.Sin.* とも一致し、完全な逐語訳である。次の 123.6-7 は一部が省略された逐語訳であるが、同時に、上の (12) について触れたように、原テクストにない ot prelьsti dьjavolę「悪魔のたぶらかしから」という説明的付加が行われている。そして最後の部分、9.7 で原テクストの **αὐτῶν**「**彼らの**」(cf. *Ps.Sin.* ichъ「彼らの」) がこの挿入された dьjavolę「悪魔」に合わせて単数の **jego**「**彼の**＝悪魔の」に変えられているのである。

14) reče bo D(a)v(y)dъ «Ps.2.11 ***rabotaite G(o)s(podo)vi sъ strachom. // i raduitesę jemu s trepeto(m).*** » my že vъzopьemъ k G(o)s(pod)u b(og)u našemu gl(agolju)šte. «Ps.123.6 (124.6) ***bl(a)g(o)s(love)nъ G(o)s(pod)ь iže ne dastь nas // v lovitvu zubomъ ichъ.*** 123.7 (124.7) [---] ***sětь skrušisę. i my izbavleni bychom***.» ot prelьsti dьjavolę. i «Ps.9.7 (9.6) [---] ***pogibe pamętĭ*** *jego* ***s šjumom***. 9.8 ***i G(o)s(pod)ь v věky prebyvaetь***. [---]» [120-30]

ダヴィデは『Ps.2.11 **恐れを持って主に仕え、// おののきを持って彼を喜べ。**』と言った。私たちは私たちの主なる神に向かって叫んで言おう、『Ps.123.6 **彼らの歯によってとらえられないように // 私たちを引き渡されなかった主は、祝福されますように。**// [---] **網の目が破れ、私たちは**』悪魔のたぶらかしから『**免れたのです**。』『Ps.9.7 [---] 彼の**記憶は音をたてて滅び**、9.8 **主は永遠にとどまられる**。[---]』

Ps.2.11 ***δουλεύσατε τῷ κυρίῳ ἐν φόβῳ // καὶ ἀγαλλιᾶσθε αὐτῷ ἐν τρόμῳ.*** Ps.123.6 ***εὐλογητὸς κύριος, ὃς οὐκ ἔδωκεν ἡμᾶς // εἰς θήραν τοῖς ὀδοῦσιν αὐτῶν.*** 123.7 ἡ ψυχὴ ἡμῶν ὡς στρουθίον ἐρρύσθη // ἐκ τῆς παγίδος τῶν θηρευόντων. // ***ἡ παγὶς συνετρίβη, καὶ ἡμεῖς ἐρρύσθημεν.*** Ps.9.7 τοῦ ἐχθροῦ ἐξέλιπον αἱ ῥομφαῖαι εἰς τέλος, καὶ πόλεις καθεῖλες, // ***ἀπώλετο τὸ μνημόσυνον*** *αὐτῶν* ***μετ' ἤχους.*** 9.8 ***καὶ ὁ κύριος εἰς τὸν αἰῶνα μένει,*** ἡτοίμασεν ἐν κρίσει τὸν θρόνον αὐτοῦ,

Ps.Sin. 2.11 *Rabotaite g(ospodo)vi sъ strachomъ*: // *i raduite sję emu sъ trepetomъ*. *Ps.Sin*.123.6 *Bl(agoslovlje)nъ g(ospod)ь: Iže ne dastъ nasъ vъ lovitvą ząbomъ ichъ*: 123.7 D(u)ša naša ěko pьtica izbavitъ sję otъ sěti lovjęštichъ: 123.8 *Sětь sъkrušisję i my izbavleni bychomъ*. *Ps.Sin*.9.7 Vražьě oskęděšję orążьě v konecь: I grady razdrušilъ e // *Pogybe pamjętь* ***ichъ*** *sъ šjumomъ*: 9.8 *I g(ospod)ь vъ věkъ prěbyvaet* // Ugotova na sądъ prěstolъ svoi:

いまひとつ、986 年のいわゆる「哲学者の言葉」の預言部分から例を挙げる。「イザヤ」63.9 および 9.5-6 である。ここでは原テクストの ἀλλ' αὐτὸς κύριος ἔσωσεν **αὐτοὺς**「しかし神自身が**彼らを**（3 人称複数）救われた」が no samъ B(og)ъ prišedъ sp(a)s(e)t **ny**「しかし神ご自身がやってきて**我々を**（1 人称複数）救われる」となり、3 人称から 1 人称への人称の変化が見られる。これにより聖書の記述は読者であるルシの人々にとって他人ごとでなく自分たち自身の問題となるのである。さらにこの改変により、後続の dětištь roditsę **namъ**「幼子が**我々のために**生まれる」との続き具合も良くなる。

15) Isaija že reče «Is. 63.9 [---] ***ni solъ ni věstnikъ. no samъ B(og)ъ*** prišedъ *sp(a)s(e)t* (pr.3sg) *ny* (1pl.Acc.).[---]» i paki «Is.9.5 (9.6) ***jako dětištь*** *roditsę*[34] (pr.3sg.) ***namъ***. [---] ***emuže*** *bys(t) načalo* ***na ramě ego i prozovetsę*** [***imę ego***] ***velika*** *světa*

34) R.A.では otroča rodisja というように正しく aor.3sg.の形が現れる。Šachmatov (1916) は aor. rodisja を採り(p.125)、リハチョフは現在形 roditsja (p.46)を採る。

***ang*(*e*)*lъ*.**[---] 9.6 (9.7) ***velika vlastъ ego. i miru ego něs*(*t*) *konca*.** [---]» [100-7]

イザヤは『Is. 63.9 [---] **使いでもなく、天使でもなく、神が自ら**来られて私たちを救われる。[---]』と、また『Is. 9.5 **みどり子が私たちのために**生れた。[---] **彼にはその肩の上に**権力があり**、[彼の名は] 大きな光の天使と呼ばれた**。[---] 9.6 **彼の権力は偉大であり、彼の平和には限りが無い。**[---]』と、[…]言った。

Is.63.9 ἐκ πάσης θλίψεως. ***οὐ πρέσβυς οὐδὲ ἄγγελος, ἀλλ' αὐτὸς κύριος*** *ἔσωσεν*(aor.3sg.) *αὐτοὺς* (3pl.Acc.) διὰ τὸ ἀγαπᾶν αὐτοὺς καὶ φείδεσθαι αὐτῶν. αὐτὸς ἐλυτρώσατο αὐτοὺς καὶ ἀνέλαβεν αὐτοὺς καὶ ὕψωσεν αὐτοὺς πάσας τὰς ἡμέρας τοῦ αἰῶνος. Is.9.5 ***ὅτι παίδιον*** *ἐγεννήθη* (aor.3sg.) ***ἡμῖν***, υἱὸς καὶ ἐδόθη ἡμῖν, ***οὗ*** *ἡ ἀρχὴ ἐγενήθη* ***ἐπὶ τοῦ ὤμου αὐτοῦ, καὶ καλεῖται τὸ ὄνομα αὐτοῦ Μεγάλης*** *βουλῆς* ***ἄγγελος***. *ἐγὼ γὰρ ἄξω εἰρήνην ἐπὶ τοὺς ἄρχοντας, εἰρήνην καὶ ὑγίειαν αὐτῷ*. 9.6 ***μεγάλη ἡ ἀρχὴ αὐτοῦ, καὶ τῆς εἰρήνης αὐτοῦ οὐκ ἔστιν ὅριον*** επὶ τὸν θρόνον Δαυιδ καὶ τὴν βασιλείαν αὐτοῦ κατορθῶσαι αὐτὴν καὶ ἀντιλαβέσθαι αὐτῆς ἐν δικαιοσύνη καὶ ἐν κρίματι ἀπὸ τοῦ νῦν καὶ εἰς τὸν αἰῶνα χρόνον. ὁ ζῆλος κυρίου σαβαωθ ποιήσει ταῦτα.

Grig.Parim. Is.63.9 ot vъsjakoę pečjali ichъ. *ni* ***chodatai*** *ni* ***ang*(*e*)*lъ***. *ną samъ* ***g*(*ospo*)*dъ*** *sp*(*a*)*se* ***ę***. zane ljubitъ ę. i štąditъ ę samъ. izbavi ę i vъsъ prijętъ ę. i vъznese ę vъ dni vjaka. Is. 9.5[35] *ěko* ***otročę rodi sę*** *namъ*. s(y)nъ danъ namъ bys(tъ). *emuže* ***vlastъ bys*(*tъ*)** *na ramě ego. i* ***nar*[*i*]*caetъ*** *sę imę* ***emu***. *velika svjata anъge*[*lъ*]. čjudenъ světnikъ. b(og)ъ krěpokъ. vlas[te]linъ c(ěsa)rъ miru. ot(ъ)cъ grędąštomu věku. privedą bo mirъ na knędzę. mirъ i sъ(dr)avie-mъ. 9.6 ***velija oblastъ*** *ego. i miru ego něstъ* ***prjaděla***. na prjastolъ ch(risto)vъ i na c(ěsa)[rъ]stvie jego. ispraviti e i zastąpiti e. sądimъ i pravdoę. ot selě i vъ věky. zavistъ g(ospo)da savaoova sъtvorit[ъ s]i.

---

35) 「イザヤ」9.5-6 は *Grig.Parim.*の 4v と 31 に現れるが、年代記テクストに近い 31 から引用した。Ribarova i Chauptova (1998) における ( ) は [ ] で示した。

勿論、このような人称や数の違いのすべてが年代記作者による意図的な改変によるわけではない。写本ができる過程で書き誤りが混入した可能性は常に存在する。その判断に迷うこともある。次は 969 年の「オリガの死」に対するコメント中に現れる「箴言」29.2 の引用である。原テクストの ἐγξωμιαζομένων δικαίων「誉め称えられる正しい人々（複数属格）」が pochvaljaemu pravednomu「誉め称えられる正しい人（単数与格）」に変わっている。これは聖書の記述における一般論（複数）からオリガその人の死（単数）へと事態を引き寄せた技法ととることも可能である。しかし一方で、先行する部分で pravednychъ bo duša「正しい人たち（複数）の魂」という名詞句[36] が複数のまま現れることは、この変化が文脈に合わせた意図的なものでないことを示すものであるかもしれない。

16) siju bo chvalęt Rustijee s(y)n(o)ve. aki načalnicju. ibo po sm(e)rti molęše B(og)a za Rusь. pr(a)v(e)dn(y)chъ bo d(u)ša ne umirajut. jakože reče Solomanъ. «Pro.29.2 *pochvala*[37] *pr(a)v(e)dn(o)mu* ***vъzveselętsę ljudьe***. [---].» b(e)ssm(e)rtьe bo estь pamętь ego. jako ot B(og)a poznavaetsę i ot čl(o)v(ě)kъ.[68-18]

この（オリガ）をルシの子らは先達として讃えている。死後も彼女がルシのために神に祈っているからである。正しい者の魂は死なない。ソロモンは『Pro.29.2 讃えられる正しい者を**人々は喜ぶ**。』と言っている。神と人々によって認められるのであるから、その思い出は不死である。

Pr.29.2 *ἐγξωμιαζομένων δικαίων* ***εὐφρανθήσονται λαοί***, // ἀρχόντων δὲ ἀσεβῶν στένουσιν ἄνδρες.

Ostrož.[38] Pr.29.2 ***Pochvalenomъ*** by vljuštimъ ***pravednymъ*** *vъzveselętsę ljudie*, // knędzemže ne čestivymъ stanut mužie.

36）これは聖書からの引用ではなく、年代記作者自身の筆になるものである。

37）カルスキー版テクスト p.68.下注 И にある「三つのテクストすべてで pochvala, しかし意味から言えば И（イパーチー本）および X（フレブニコフ本）にある pochvaljaemu の読みが必要」に従って解釈したい。

38）シャフマトフによれば Parimejnik 起源とされるが、*Grig.Parim.*ではこの部分は欠けている。

次は、6463(955)年の「オリガの洗礼」のコメント中の一節である。ここでは、ギリシア語原典との数の違いが意図的なものでなく、偶然によるものであることが、はっきりと確かめられる。まず「箴言」の3つの箇所からの引用が連続する。12.19 および 2.2 は省略部分を除けば、完璧な逐語訳である。続く 8.17 はまるまる一節を省略せずに引用している[39]。問題はその後の「ヨハネ」6.37 である。ギリシア語原典の **τὸν ἐρχόμενον** πρὸς ἐμὲ (cf. *Mar.* grędąštaago ko mьně)「私のもとに**来る者**（単数）を」が、複数形 **prichodęštaja** ko mně「私のもとに**来る者たちを**（複数・対格）」で現れている。この部分は先行する「箴言」8.17 の内容と連続しており、一見して、そこに現れる複数形 τοὺς ἐμε φιλοῦντας > ljubęštaja mę「私を愛する者たちを」および ὁι δὲ ἐμὲ ζητοῦντες > ištjuštii mene「私を求める者たちは」との整合性から、「ヨハネ」6.37 でも意図的な改変が行われ複数形が現れたと考えたくなる。しかしここでは写本の成立過程で誤った形が混入したと見るのが妥当である。後続の動詞を見ると iženutь「彼らは追い出す(pr.3pl.)」という3人称複数の形が現れている。しかし、prichodęštaja ko mně「私のもとに来る者たちを」は対格であって、この動詞の主語にはなり得ないし、意味からみて不特定の主語を考えることも困難である。これは明らかに1人称単数 iženu「（私は）追い出す」の書き誤りである。事実異本を見ると、ラヂヴィル本では izženu, アカデミー本でも iždenu といずれも1人称単数で現れる。そして問題の prichodęštaja の部分も、これらの写本ではギリシア語原典と同じ単数形の prichodęštago が現れている。以上、ラヴレンチー写本の複数形 prichodęštaja という形は意図的な改変によるものではなく、写本作成の過程で混入した書き誤り、文脈の乱れによるものであることが分かる[40]。

17) reče bo Solomanъ «Pro.13.19 ***želanьe. bl(a)g(o)v(e)rn(y)chъ naslaženьi***[41] ***d(u)šju***. [---]. «Pro. 2.2 [---] ***i priložiši vъ***[42] ***s(e)r(d)ce***

39）但し動詞の分詞形と目的語の語順の違いや、ギリシア語の δέ を že「しかるに」でなく i「そして」で訳しているといった細かい違いがある。
40）勿論、この書き誤りが先行する複数形 ljubęštaja や ištjuštii の影響で起きたと考えることは自然である。
41）R.A.に従って naslažaet と読む。
42）R.A.に従ってこの vь はないものとして読む。

tvoe v razumъ [---] » «Pro.8.17 ***azъ*** *ljubęštaja mę* ***ljublju***. // *i ištjuštii mene* ***obręštjutь*** mę.» G(o)s(pod)ь reče «Jn.6.37 [---] ***prichodęštaja***[43] ***ko mně ne*** *iženutь*(pr.3pl.) ***vonъ***.[62-21]
『Pro.13.19 **信仰厚い者の願いは心を楽しませる**。[---]。』『Pro.2.2 [---] **あなたの心を悟りに向けて下さい**。』『Pro.8.17 **私は**私を愛する者たちを**愛し**、// 私を求める者たちは、**私に出会うであろう**』『Jn.6.27 [---] **私は、私のもとに来る者たちを決して拒みはしない**。』
Pro.13.19 ***ἐπιθυμίαι εὐσεβῶν ἡδύνουσιν ψυχήν,*** // ἔργα δὲ ασεβῶν μακρὰν ἀπὸ γνώσεως. Pro.2.2 ὑπακούσεται σοφίας τὸ οὖς σου, // ***καὶ παραβαλεῖς καρδίαν σου εἰς σύνεσιν,*** // παραβαλεῖς δὲ αὐτήν ἐπὶ νουθέτησιν τῷ υἱῷ σου. Pro.8.17 ***ἐγὼ*** *τοὺς ἐμε φιλοῦντας* ***ἀγαπῶ*** // *ὁι δὲ ἐμὲ ζητοῦντες* ***εὑρήσουσιν.*** Jn.6.37 Πᾶν ὃ δίδωσίν μοι ὁ πατηρ πρὸς ἐμὲ ἥξει, καὶ ***τὸν ἐρχόμενον πρὸς ἐμὲ οὐ μὴ*** *ἐκβάλω* (pr.1sg.) ***ἔξω,***
Grig.Par.[44] Pro.13.19 *želani*[*e blagověrnychь* ***naslaždaetь***] ***d***(***u***)***š***[***a*** děla že nežьstivychь daleče] ot r[azuma]. Pro.2.2 poslušaetь prěmądrosti ucho tvoe. *i* ***priloži*** *sr*(ъ)*d*(ь)*ce tvoe v razumъ*. priložьši že nakazanie s(y)nu tvoemu. Pro.8.17 *azъ ljubęštągę mę ljubę. // iskąšti že mene obrjatągtъ mę. Mar.* Jn.6.37 vьse eže dastъ mьně otьcъ kъ mьně pridetъ. i ***grędąštaago*** *ko mьně ne* ***iždeną*** *vonъ.*

3. 2. 代名詞の名詞化

本来の聖書テクスト中に代名詞が現れる場合、これを周囲の文脈から切り離して引用すると、何を指しているのか分かりにくくなる。そのようなとき、名詞に直して引用することがある。

最初の例は 986 年の「哲学者の言葉」の預言の部分に現れる「ゼカリヤ」からの引用である。始めと終わりが省略されているが、実際に現れる部分はほぼ完璧な逐語訳である。ただ一点、原テクストとの大きな違いとして οὐκ εἰσήκουσαν **αυτοῦ**「（人々は）彼（3 人称単数代名詞）の言うことを聞かなかった」を ne poslušaša **s(y)na moego**.「（人々は）

43）R.A.では prichodęštago.
44）[ ]の中は Lobkovskij Parimejnik および Zachariev Parimejnik より補った。

私の子の言うことを聞かなかった」とし、代名詞を普通名詞で訳している点が挙げられる。

18) Zacharьja že reč(e) «Zach.7.13 [---] ***ne poslušaša*** *s(y)na moego*. [---] ***i ne uslyšju*** ich. ***gl(agole)tь G(ospod)ь.***»[100-26]
ゼカリヤは『Zach.7.13 [---]**（人々は）**私の子の**言うことを聞かなかった。だから私は**彼らの言うことを**聞くまい。**（こう）**主は言われる**』と言いました。
Zach.7.13 καὶ ἔσται ὃν τρόπον εἶπεν καὶ ***οὐκ εἰσήκουσαν*** αυτοῦ, οὕτως κεκράξονται ***καὶ οὐ μὴ εἰσακούσω, λέγει κύριος*** παντοκράτωρ.
Ostrož. Zach.7.13 i budetь vneže kovarьstvo reče, i *ne* ***uslyšaša ego***. sice vьzъpijutь, *i ne* ***imamъ uslyšati***, *gl(agol)etь g(ospod)ь* vse drъžitelь.

次も同じ 986 年の「哲学者の言葉」中の預言部分に見られる「エレミヤ」からの引用である。ここでは 3 人称単数の代名詞 αυτόν「彼を」を **životь** ego「彼の**命を**」という名詞を用いた表現に置き換えている。勿論、このように変えたからと言って「彼」の指示対象が明確になるわけではない。しかし、životь「命」という普通名詞の使用により、説教の内容がより具体的になり、読む者の理解を助けるという効果が得られる。

19) Ijeremija že reč(e). «Ier.11.19 [---] ***priděte*** [---] ***vložimъ drevo vъ chlěbъ ego***. [---] ***istrebimъ*** *ot zemlę životь ego*. [---]» [101-6]
エレミヤは『Ier.11.19 [---]**来なさい。**[---] **私たちは木を彼の食べ物の中に置こう。**[---] **私たちは**地上から彼の生命を**滅ぼそう**[---]』と言いました。
Ier.11.19 ἐγὼ δὲ ὡς ἀρνίον ἄκακον ἀγόμενον τοῦ θύεσθαι οὐκ ἔγνων. ἐπ' ἐμὲ ἐλογίσαντο λογισμὸν πονηρὸν λέγοντες ***Δεῦτε*** καὶ ***ἐμβάλωμεν ξύλον εἰς τὸν ἄρτον αὐτοῦ*** καὶ ***ἐκτρίψωμεν*** *αὐτὸν ἀπὸ γῆς ζώντων*, καὶ τὸ ὄνομα αὐτοῦ οὐ μὴ μνηστῇ ἔτι.
Grig.Parim. Ier.11.19 azъ že ěko agnę bezlobno. vodimъ na zakolenie. ne razuměchъ ěko na mę pomyslišą pomyšlenie

gl(agol)ęšte. *priděte vložimъ drěvo vъ chlěbъ ego.* i ***istrěmy*** *ot zemę* ***živychъ***. imę ego ne bądetъ pomęnoveno k tomu.

3. 3. 間接的引用に起因する改変

以上、年代記作者による聖書本文の意図的な改変と思われるものについて見てきた。一方で、細かい点で、ギリシア語原典と語順が違ったり、文法的範疇の違いがあっても、それがとくに意図的な改変とは考えられない場合も見られた。その大部分は偶然によるものであり、写本の作成の過程で混入したとする以外、説明は困難である。但し、一部については、年代記作者以前の改変、年代記の作者が典拠としたより古い時代の文献の段階での改変として説明できるものもある。すなわち、直接聖書テクストから引用されたのではなく、他の文献を経た間接的な引用の場合である。

その例の一つとして、1068 年の「ポロフツィの侵攻」に際してのコメント、いわゆるシャフマトフの Poučenie o kaznjach božiich「神の罰についての教え」中に現れる引用を挙げる。シャフマトフはこれを年代記作者の創作になるものではないとし、シメオン帝の時代にブルガリアで成立した Ioann Zlatoust の著作・説教集 «Simeonov Zlatostruj» 中の Slovo o vedre i o kaznjach božijach「干ばつと神の罰についての言葉」にその起源が求められることを示している。cf. Šachmatov (1940: 104ff.). ここでは Šachmatov (1940) に引用された «Zlatostruj»のテクストを参照しつつ、引用テクストと聖書本文の異同について見てみたい[45]。

まず、最初の「イザヤ」48.4 でギリシア語原典の現在形 γινώσκω (pr.1sg.)「私は知っている」がアオリスト razuměchъ (aor.1sg.)「私は知った」になっているが、これは«Zlatostruj»の razuměchъ と同じ形である。また νεῦρον σιδηροῦν ὁ τραχηλός σου「あなたの首は鉄の筋である」が単純化され šija želěznaja tvoja「あなたの首は鉄である」になっているが、これも«Zlatostruj»にある šija želěznaja vyja tvoja「あなた

45）シャフマトフによれば、『過ぎし年月の物語』のこの部分と «Zlatostruj» 中の «Slovo o vedre i o kaznjach božiich» の関係を最初に指摘したのは I. I. Sreznevskij である。この作品のギリシア語のテクストはまだ同定されていない。ここで引用したスラブ語訳のテクストは Publičnaja biblioteka 所蔵の写本の l. 127 以下に従って Shachmatov (1940: 105ff) に掲載されたものである。

の首は鉄の首」から出たと思われる。異本を見ると、ラヂヴィル本とアカデミー本ではこの šija železnaja vyja tvoja という形がそのまま現れている。

20)těmže pr(o)r(o)k(o)mъ nam gl(agolj)etь. «Is.48.4 [razu]měchъ (aor.1sg.)» reč(e) ***«jako žestokъ jesi i** šija želěznaja **tvoja***[46]. [---]»[168-9]
そのために（神は）預言者を通じて私たちに言われる。『Is.48.4 **私はあなたがかたくなで、あなたの**首が鉄（の首）である**ことを**知った』
«Is.48.4 γινώσκω (pr.1sg.) ἐγὼ ***ὅτι σκληρὸς εἶ, καὶ** νεῦρον σιδηροῦν ὁ τραχηλός **σου,** καὶ το μέτωπόν σου χαλκοῦν.»
Zlatostruj. bogъ *prorokъmь namъ glagoletъ: razuměchъ, reče, jako žestokъ esi i šija želězna* vyja *tvoja,* (Šachmatov 1940: 106)

この後さらに、21）に見るように「アモス書」からの引用が続く。まず 4.7 ではギリシア語原典にある πόλις「町」に関する記述と μερίς「土地の部分」についての記述が一つにまとめられている。また動詞の未来形がアオリストに変わっている。これも «Zlatostruj» における改変によるものである。さらに 4.9 では、ギリシア語原典にある ἐν ἰκτέρῳ「葉枯病をもって」という表現が、različnymi kaznьmi.「さまざまな罰をもって」という、より一般的な表現に直されている。また、ギリシア語原典で後の方に現れる καὶ οὐδ’ ὧς ἐπεστρέψατε πρός με「それでもあなた方は私に帰らなかった」をそのまま前の方に移して、to i tako ne obratistesę ko mně「それでもあなたがたは私に帰らなかった」とし、同時に前の方にあった ἐπληθύνατε κήπους ὑμῶν, ἀμπελῶνας ὑμῶν καὶ συκῶνας ὑμῶν καὶ ἐλαιῶνας ὑμῶν κατέφαγεν ἡ κάμπη「あなた方はあなたがたの果樹園と葡萄畑といちじく畑を増やしたが、芋虫があなた方のオリブ園を食い尽くした」の部分の主語と文法関係を変えて vinogrady vašě i smokovьe vaše. nivy i dubravy vaša istrochъ「あなたがたの葡萄畑、あなたがたのイチジク、そしてあなたがたの畑や樫の森を私は滅ぼした」としたうえで後ろに持ってきている。さらに最後の 4.10 では、

46）R. A.では šija želěznaja vyja tvoa「あなたの首は鉄の首である」。

始めと終わりの部分だけが実際に引用され、かつ始めの部分はかなり形を変えている。ギリシア語原典の θάνατον「死を、疫病を」という一語が različnyja bolězni i smerti tężkyja「様々な病と苦しい死を」に拡張されていると考えることもできるし（例文ではこの考えを示した）、καὶ ἀπέκτεινα ἐν ῥομφαίᾳ τοὺς νεανίσκους ὑμῶν μετὰ αἰχμαλωσίας ἵππων σου「そして剣をもって、あなたがたの若者を、あなたがたの奪い去られた馬もろとも斬り殺す」の部分が i smerti tężkyja. i na skoty kaznь svoju poslach.「苦しい死を送り、家畜には罰を下した」に言い換えられていると見ることも可能である。いずれにせよ、この改変はすべて «Zlatostruj» の段階で行われたものである。

21) togo radi «Am.4.7 [---] ***uderžachъ ot vasъ doždь.*** [---] *predělъ jedinъ odoždichъ* (aor.1sg.). *a drugago ne odoždichъ* (aor.1sg.) [---] ***išše*** (aor.3sg.).» «4.9 [i] ***porazichъ vy znoemь***. *i različnymi kaznьmi*. […] *to i tako ne obratistesę ko mně*.» sego radi «4.9 *vinogrady vašě i smokovьe vaše. nivy i dubravy vaša istrochъ gl(agolj)etь G(o)s(pod)ь*.» «4.10 ***poslachъ na vy*** *različnyja bolězni i smerti tężkyja*.» i na skoty kaznь svoju poslach. «4.10 ***to i tu ne obratistesę***» no rěste "mužajemъsę."

それだから『Am.4.7 **私は雨をとどめてあなたがたの上に下さず、この地方には雨を降らし、かの地方には雨を降らさず、乾かせて**』『4.9 **そして私はあなたがたを熱をもって**、さまざまな罰をもって**滅ぼした**。[…] それでもあなたがたは私に帰らなかった』。この故に『4.9 あなたがたの葡萄畑、あなたがたのイチジク、そしてあなたがたの畑や樫の森を私は滅ぼした、と神は言われる』。『4.10. **私はあなたがたに**さまざまな病気と苦しい死を**おくり**、』家畜には罰を下した。『4.10 **それでもあなたがたは（私に）心を向けずに**、』「私たちは勇気を出そう」と言った。]

Amos 4.7 καὶ ἐγὼ ***ἀνέσχον ἐξ ὑμῶν τὸν ὑετὸν*** πρὸ τριῶν μηνῶν τοῦ τρυγήτου. καὶ *βρέξω* (ft.1sg.) ***ἐπὶ πόλιν μίαν,*** *ἐπὶ δὲ πόλιν μίαν οὐ βρέξω* (ft.1sg.). μερὶς μία βραχήσεται, καὶ μερίς, ἐφ' ἣν οὐ βρέξω ἐπ' αὐτήν, ***ξηρανθήσεται*** (P.ft.3sg.). 4.9 ***ἐπάταξα ὑμᾶς ἐν πυρώσει*** *καὶ ἐν ἰκτέρῳ. ἐπληθύνατε κήπους ὑμῶν, ἀμπελῶνας*

ὑμῶν καὶ συκῶνας ὑμῶν καὶ ἐλαιῶνας ὑμῶν κατέφαγεν ἡ κάμπη. καὶ ουδ' ὧς ἐπεστρέψατε πρός με, λέγει κύριος. 4.10. ***ἐξαπέστειλα εἰς ὑμᾶς*** *θάνατον* ἐν ὁδῷ Αἰγύπτου καὶ ἀπέκτεινα ἐν ῥομφαίᾳ τοὺς νεανίσκους ὑμῶν μετὰ αἰχμαλωσίας ἵππων σου καὶ ἀνήγαγον ἐν πυρὶ τὰς παρεμβολὰς ὑμῶν ἐν τῇ ὀργῇ μου. ***καὶ οὐδ' ὧς ἐπεστρέψατε*** πρός με, λέγει κύριος.

Zlatostruj. togo radi uděržachъ otъ vasъ dъždь, ***dělъ*** že *edinъ odъždichъ i drugaago ne odъždichъ,* i *isъše, porazichъ vy znoimь i različьnyimi* ***jazjami****, to i tako ne obratistesja kъ mъně,* nъ rekoste: stvorimъ zьlaja da pridutь na ny dobraja, požьrěmъ studenьcemъ i rěkamъ i sětьmъ, da ulučimъ prošenija svoja. *Sego radi vinograd vaša i smokъvi vaša i nivy i dubravy istъrochъ, glagoletь gospodь,* a zьlobъ vašichъ ne mogochъ istьrti; *posъlachъ na vy različьny bolězni i sъmьrti tjažьky i na skotěchъ kaznь svoju* ***pokazachъ,*** *to i* ***tako*** *ne obratistesja, nъ rěste: mužaimъsja.* Dokolě ne nasytistesja zьlobъ vašichъ. Šachmatov (1940: 106)

以上のような«Zlatostruj»における聖書本文の改変と比べると、本稿で見てきた年代記作者による改変はかなり性格を異にすることが分かる。『過ぎし年月の物語』では、引用に際して大胆な省略が行われるが、その一方、実際に引用された部分については聖書本文に極めて忠実な訳であり、原テクストとの対応関係を見つけることは容易である。時として文法範疇の変更や説明的要素の付加も行われるが、それはいわば最小限の改変で最大限の効果を上げる、といった性格のものである。それに対して«Zlatostruj»における改変は、一部は確かにもとの聖書本文の構造をそのまま残しているが、一部は完全にそれを作者自身の言葉で置き換えたものである。

3. 4. 比喩表現としての引用

聖書の言葉が、人々に対する「教え」としてでなく、当該の情景を記述するのに最適な表現、あるいは比喩的表現として使用されることがある[47]。

47）Danilevskij (1993), Raba (1992) は、聖書からの引用は年代記中で歴史的事実をより正確に伝えるために用いられているとする。

次は 1093 年の「ポロフツィ」の侵攻についての記事である。「ダニエル」「詩篇」「福音書」からの引用が連続して現れる。文法構造が異なっている部分もあり、ギリシア語原典との対応関係がはっきりしない部分もあるが、いずれも「コメント」というより、むしろポロフツィに侵攻されたルシの様子を明確に述べるための比喩的表現として使われている。最初の「ダニエル」からの引用は、引用と聞かされなければ全く気が付かないほどこの部分に当てはまっている。一方、最後の「ルカ」は、福音書のこの箇所を知っている読者に対して強く訴えかける力を持っている。

22) podobaše nam. «Dan.3.32[48] [*predanymъ byti*] [---] ***v ruky*** *jazyku strannu*. [---] ***i bezakonьněišju vseja zemlę***[49].» rcěmъ velegl(a)sno «Ps.118.137 (119.137) ***pravedenъ jesi G(o)s(pod)i. // i pravi sudi tvoi***.» rcěmъ po onomu razboiniku «Lc.23.41 [---] ***my*** [---] ***dostoinaja***. [---] ***jaže sdějachomъ prijachom***.» [223-21]
私たちにとって、『Dan.3.32 **この大地全体の中でより無法な**、[---] 見知らぬ民の**手に**［委ねられることは］』ふさわしいことであった。声を大にして『Ps.118.137 **主よ、あなたは正しく、// あなたの裁きは正しいのです**』と言おう。あの盗賊にならって、『Lc.23.41 [---] **我々はやったことの報いを受けているのだから当然だ**[---]』と言おう。
Dan.[θ'] 3.32 καὶ *παρέδωκας* ἡμᾶς *εἰσ* ***χεῖρας*** *ἐχθρῶν ἀνόμων* ἐχθίστων ἀποστατῶν καὶ βασιλεῖ ἀδίκῳ ***καὶ πονηροτάτω παρὰ πᾶσαν τὴν γῆν.*** Ps.118.137 ***Δίκαιος εἶ, κύριε,// καὶ εὐθὴς ἡ κρίσις σου.*** Lc.23.41 καὶ ***ἡμεῖς*** μὲν δικαίως, ***ἄξια*** γὰρ ***ὧν ἐπράξαμεν ἀπολαμβάνομεν.*** οὗτος δὲ οὐδὲν ἄτοπον ἔπραξεν.
Grig.Parim. Dan.3.32 i ***prědastъ ny*** *v rącě* ***vragъ bezakonenъ***.

48) Šachmatov (1940) によれば Parimejnik から取られたという。ヘブライ語聖書に基づく日本語訳聖書では「ダニエル書」3 章は 30 節しかないが、*LXX* では日本語訳の 23 節と 24 節の間に 24 節から 90 節までが挿入され、日本語訳の 24 節以降は 91 節以降として現れる。現代ロシア語訳聖書も同様である。

49) Šachmatov (1916: 281) はこの部分を podobaše bo namъ “Vъ ruky predanomъ byti jazyku straněnu i bezakonьnu i lukavьněišju pače vьseja zemlja”としている。Lichačev (1996: 94) は podabaše nam “Predanymъ byti v ruky jazyku strannu i bezakonьnějšju vseja zemlja”としている。

mrьzokь prěstąpnikь. c(ěsa)rju nepravednu. ***ląkavněišu*** že pače *vьseę zemę*. Ps.Sin.118.137 ***Pravьdenъ esi g(ospod)i*** // ***i pravii sądi tvoi***: *Mar*. Lc.23.41 i *vě* ubo vь pravьdą *dostoinaa* bo ***dělomъ naju*** *vьspriemlevě*. a sь ničьsože zьla ne sьtvori.

次は 980 年の記事中の、回心前のヴラヂミルに唆されたヤロポルクの軍司令官ブルドが、主君のヤロポルクを裏切った事件に対するコメントである。「詩篇」40.10 からの引用で、多少の文法的変更はあるが、ほぼ忠実な訳である[50]。

23) zlaja lestь čl(**o**)v(ě)č(**e**)ska. jakože D(**a**)v(**y**)dь gl(agole)tь «Ps.40.10 (41.9) [---] ***jadyi chlěbъ*** (sg.Acc.) ***moi.*** // ***vъzveličilъ*** (pf.3sg.) ***estь na mę lestь***.»[76-26]
ああ、人間の邪悪な欺瞞よ。ダビデが言っているように、『Ps.40.10 (41.9) **私のパンを食べた者が // 私に対して偽りを行った**』のである。
Ps.40.10 καὶ γὰρ ὁ ἄνθρωπος τῆς εἰρήνης μοῦ, ἐφ' ὃν ἤλπισα, // ***ὁ ἐσθίων ἄρτους*** (pl.Acc.) ***μου***, // ***ἐμεγάλυνεν*** (impf.3sg.) ***ἐπ' ἐμὲ πτερνισμόν***.
Ps.Sin. 40.10 Ibo čl(o)v(ě)kъ mira moego na nьže upьvachъ: // *Ědyi chlěby moję* (pl.Acc.) // vъzveličilъ estь na mję **kovь**:

いま一つ 1015 年の「ボリスとグレブの死」の記事から例を引く。これも「詩篇」から取られた表現である。一部省略されているが、完璧な逐語訳である[51]。この引用により、グレブを殺した暗殺者たちが主人スヴャトポルクのもとに帰っていく様子が生き生きと形容されている。

24) okanьnii že vъzvratišasę vъspętь. jakože reč(**e**). D(**a**)v(**y**)dь. «Ps.9.18 (9.17) ***da vъzvratętsę*** (Da+pr.3pl.) ***grěšnici vъ adъ***.

---

50) ギリシア語原典の impf.が古ロシア語テクストでは pf.に訳されているが、これは *Ps.Sin.*でも同じである。なお詩篇のこの箇所は『新約聖書』Jn.13.18 に引用されており、年代記の引用がそこから取られた可能性も否定できない。
51) ギリシア語の命令法を直接法 3 人称複数で訳した *Ps.Sin.*に比べ、da による命令法を用いた年代記テクストの方がより忠実な訳である

[---]» [136-29]
呪われた者たちは、『Ps.9.18 **罪人たちは地獄に帰れ**。[---]』とダビデが言っているように戻っていった。
Ps.9.18 ***ἀποστραφήτωσαν*** (2aor.Pass.Imper.3pl.) ***οἱ ἁμαρτωλοὶ εἰς τὸν ᾅδην,*** // πάντα τὰ ἔθνη τὰ ἐπιλανθανόμενα τοῦ θεοῦ.
Ps.Sin. 9.18 ***Vъzvratjętъ*** (pr.3pl.) ***sję*** *grěšьnici vь adъ*: // Vьsi języci zabyvająštii b(og)a:

以上のような表現が読者の心に訴えかけるとすれば、それは彼らも聖書に親しみ、このような表現が聖書にあることを知っていることが前提となる。言い換えれば、年代記作者としての修道僧たちだけでなく、読者として想定されていた当時のルシの市民、少なくとも識字階級の人たちもまた、聖書の内容や表現、字句を十分に知っていたことになる。

4．一般人の聖書知識

前章で、僧たちだけでなく、世俗の人々もまた聖書についての知識を持っていたことを述べた。「モノマフの教え」「モノマフの手紙」を書き残したキエフ大公ヴラヂミル・フセヴォロドヴィチもその一人である。

政治家としてのモノマフ、武人としてのモノマフは本当に自ら「教え」を書いたのだろうか？本当に自らが好む聖書の言葉を書き連ねたのだろうか？そのような疑問を持つかもしれない。しかし、年代記の記事は、彼が普段から聖書を良く読み、その内容を暗記し、日常の生活の中で必要に応じて自由に引証することができたことを鮮やかに示している。その例が、1103 年の「ポロフツィとの戦い」に勝ったときヴラヂミルが発したとされる言葉である。このとき、この勝利を表すのに最も適切な表現として、まず「詩篇」117.24 が完璧な形で彼の口から出てくる。引用された箇所は *LXX* とも *Ps.Sin.*とも完全に一致している。このことは彼が聖書のこの箇所を暗誦していたことを示している[52)]。ついで、

52）勿論、年代記作者がこの事件を記録にとどめる際に、聖書本文を参照して、完全なテクストとして記録したという解釈も成り立つ。しかし少なくとも、聖書のこの箇所が自然にモノマフの口をついて出たという事実は否定できない。

「詩篇」73.14 が彼の口から出てくる。そしてこれは、状況に合わせて巧みに改変されている。すなわち、原文の λαοῖς **τοῖς Αἰθίοψιν**「エチオピアの民」> *Ps.Sin.* ljudemъ **etiopьskomъ**「**エチオピアの**民」が ljudem **Rusьskym**「**ルシの**民」に変えられているのである。このことは、ヴラヂミル・モノマフが聖書の言葉をいつでも自由に引証できたと同時に、必要に応じて即妙に改変する機転を持っていたことを示している。

25)i reč(e) Volodimerъ. «Ps.117.24 (118.24) ***sь d(e)nь iže stvori G(o)s(pod)ь. // vъzraduemsę i vъzveselimsě vo nь.***» jako G(o)s(pod)ь izbavilъ ny e ot vragъ našich. i pokori vragy naša. «Ps. 73.14 (74.14) i ***skruši*** (aor.2/3sg.)[53] ***glavy zmievyja. // i dalъ jesi*** sich ***brašno ljudem*** *Rusьskym*.» [279-20]

そしてヴラヂミルは、『Ps.117.24 **私たちは主が行われたこの日を喜び、この日を楽しもう**』。主が私たちを敵から救われ、敵を征服し、『Ps. 73.14 **蛇のような（彼らの）頭を滅ぼして**ルシの人々にそれを**食物として与えられたからだ**』と言った。

Ps.117.24 ***αὕτη ἡ ἡμέρα, ἣν ἐποίησεν ὁ κύριος. // ἀγαλλιασώμεθα καὶ εὐφρανθῶμεν ἐν αὐτῇ.*** Ps.73.14 *σὺ* ***συνέθλασας*** (aor.2sg.) ***τὰς κεφαλὰς τοῦ δράκοντος, // ἔδωκας αὐτὸν βρῶμα λαοῖς τοῖς Αἰθίοψιν.***

*Ps.Sin.*117.24 *Sь denь iže sъtvori g(ospod)ь: // Vъzdraduimъ sję i vъzveselimъ sję vo nь: Ps.Sin.*73.14 *Ty sъtlъče* (aor.2sg.) *glavą zmьevą. // dalъ esi brašьno ljudemъ* ***etiopьskomъ***.

しかし、このモノマフにも誤解や誤りがなかったわけではない。次は「モノマフの手紙」に見られる例であるが、明らかに引用として示されているにも拘わらず、引用元を明確に同定できない。むしろいくつかの箇所から合成して引用したものではないかと思われる。候補となるのは「マタイ」6.15 と 18.35 である。語彙的にも重なり、全体の意味もよく

53）形の上からは 2sg., 3sg.両方の可能性がある。もし 3sg.であるとすればギリシア語原典の aor.2sg.を文脈に合わせて、すなわち先行する Gospodь を主語とする 3 人称単数に変えたと理解することも可能である。

似ている。その際、全体の構造は「マタイ」6.15 の方により近いが、一方で前半の bratu「兄弟を」という語は「マタイ」18.35 後半の ἀδελφῷ > bratru から、後半の vam「あなた方を」と n(e)b(es)nyi「天の」は「マタイ」18.35 前半の vamъ「あなた方を」と n(e)b(e)s(ьs)kъ「天の」から取られているようにも見える。この合成は意図的なものというより、モノマフの記憶の混乱によるものと思われる[54]。

26）«Mt.6.15+Mt.18.35 ***ašte ne otpustite pregrěšenii bratu. ni vam otpustitь o(te)cь vašь n(e)b(es)nyi.***»
『Mt.6.15+Mt.18.35 **またもし兄弟の罪を許さないならば、あなたがたの天の父もあなたがたを許して下さらないであろう**。』
Mt.6.15 ***ἐὰν*** δὲ ***μὴ ἀφῆτε*** τοῖς ἀνθρώποις ***τὰ παραπτώματα*** αὐτῶν[55], ***οὐδὲ ὁ πατὴρ ὑμῶν ἀφήσει*** τὰ παραπτώματα ὑμῶν.
Mt.18.35 Οὕτως καὶ ὁ πατήρ μου ***ὁ οὐράνιος*** ποιήσει ***ὑμῖν*** ἐὰν μὴ ἀφῆτε ἕκαστος ***τῷ ἀδελφῷ*** αὐτοῦ ἀπὸ τῶν καρδιῶν ὑμῶν.
Mar. Mt.6.15 *ašte* li *ne otъpuštaete* čl(lo)v(ě)komъ *sъgrěšeni* ichъ. *ni ot*(ь)*cь vašь otъpustitь* sъgrěšenii vašichъ.
Mar. Mt.18.35 Tako i otecь moi *n*(*e*)*b*(*e*)*s*(*ьs*)*kъ* sъtvoritь *vamъ*. ašte ne otъpuštaate kožьdo *bratru* svoemu otъ sr(ъ)d(ь)cь vašichъ.

さらには「モノマフ」の手紙には、引用箇所が誤って示されている箇所もある。次は「詩篇」36.1 からの完璧な引用であり、部分的には *Ps.Sin.* よりも正確な訳である。しかしこのダヴィデの歌の一つを引用するに当たり、彼は prorokъ glagoletь「預言者は言う」としている。

27）pr(o)r(o)kъ gl(agole)tь «Ps.36.1 (37.1) ***ne revnui*** (Imper.2sg.) ***lukavnujuštim. // ni zavidi tvoręštimъ bezakonьe.***» [252-20]
預言者は『Ps.36.1 **悪を行う者のゆえに心を悩ますな。// 不義を行う者のゆえにねたみを起すな**』と言っている。

54）勿論、写本の成立過程でテクストの混乱が生じた可能性は否定できない。
55）*GNT* 主テクストでは αὐτῶν は現れないが、B K L W Δ Θ Π f^{13} 28 33 565 700 892^{mg} 1009 1010 1071 1079 1195 1216 1230 1241 1242 1253 1365 1546 1646 2184 2174 *Byz Lect* に従って補った。

Ps.36.1 Τοῦ Δαυιδ // ***Μὴ παραζήλου*** (Imper.pr.2sg.) ***ἐν πονερευομένοις*** // ***μηδὲ ζήλου τοὺς ποιοῦντας τὴν ανομίαν.***»
*Ps.Sin.*36.1 Slava psal(om) dav(ydov)ь. // *Ne revьnuite* (Imper.2pl.) *ląkavьnująštiimъ*: // *Ni zavidi tvorjęštiimъ bezakonenie*:

以上、ヴラヂミル・モノマフは自ら聖書を良く読み、その行文を暗誦し、日常生活の中で自由に引くことができた一方で、二つの箇所から混同して引用したり、引用箇所を間違えるというような、誰にでもありがちな些細な間違いを犯すこともあったことが分かる。

5．結　語

以上本稿では『過ぎし年月の物語』中に現れる聖書本文からの引用について観察されることを述べた。そして「福音書」「使徒書簡」「詩篇」「詩篇以外の旧約」のいずれについても古教会スラブ語訳テクストに勝るとも劣らぬ正確な逐語訳の引用があることを確認した。同時に、実際の引用に当たっては、聖書の語句を一字一句違えず、つねにそのまま引用するわけではなく、必要に応じて、その部分を抜粋し、ときには離れた部分あるいは全く異なる箇所からの引用を合成すること、また周囲の文脈に合うように、さらには読者としてのルシの人々により強く訴えかけるために、動詞や名詞の人称や数を変えたりすること、代名詞を名詞に直したり、説明的な語句を挿入することといった、いわば聖書本文の改変がかなり自由に行われていることを示した。これは、年代記作者が聖書について広く深い知識を持っており、必要に応じて自由に引用する能力を持っていたことを示している。一方で年代記作者による聖書本文の改変は、«Zlatostruj»におけるそれと比べると極めて繊細で、節度を持ったものである。また、聖書本文が「教え」や「コメント」として使われるだけでなく、特定の状況を描写するためにふさわしい表現、比喩的表現として使われている例も示した。このことは、読み手の側にも聖書についての知識があって初めてその表現が比喩として成立することを考えると、世俗の人々の間にも聖書の知識が普及していたことを意味する。その具体例として自らも「教訓」「手紙」の著者として知られるキ

エフ大公ヴラヂミル・モノマフの聖書の知識について考察した。

一方で、細かい点で、ギリシア語原典と語順や文法範疇において違いがあり、それが意図的な改変とは考えられない場合も見られた。その多くは、写本の作成の過程において混入した偶然の変化によると考えられるが、一部については、年代記の作者が典拠としたより古い時代の文献における改変として説明できるものもあった。

本稿の議論は網羅的なものではない。引用のパターン、タイプと「福音書」「使徒書簡」「詩篇」「詩篇以外の旧約聖書」といった聖書テクストのタイプ、あるいは Parimejnik を通しての引用かどうかといった違いとの関係、さらには『過ぎし年月の物語』の成立の過程と引用された聖書本文の関係についても、明確な議論はできなかった。986 年のいわゆる「哲学者の言葉」の旧約からの預言部分についても、これが何らかの中間的な著作によるものか聖書からの直接の引用なのかということについて、特に議論はしなかった。これらはすべて今後の課題である。しかし、『過ぎし年月の物語』を初めとするロシアの年代記、あるいは他の中世スラブの文献における聖書からの引用について論じる場合に考慮すべき、基本的問題を提示することはできたと考える。

テクスト

Grig.Par.: Ribarova, Zdenka i Zoe Hauptova (1998) *Grigorovičev Parimejnik,* I. *Tekst so kritički aparat*. Skopje: Makedonska Akademija na Naukite i Umetnostite.

Mar.: Jagić, V. (1883) *Quattuor evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus glagoliticus*. St. Peterburg.（引用は Graz: Akademische Druck-u.Verlagsanstalt.1969 による）

Zogr.: Jagić, V. (1879) *Quattuor evangeliorum codex glagoliticus olim Zographensis nunc Petropolitanus*. Berlin.（引用は Graz: Akademische Druck-u.Verlagsanstalt. 1954 による）

Lavrent'evskaja letopis', vyp.1: *Povest' vremennych let, Polnoe sobranie Russkich letopisej,* t.1. izd.2. 1926. Leningrad.（引用は Müller, L. Handbuch zur Nestorchronik, B.1, Forum Slavicum, B.48, München

1977 による）

Ps.Sin.: Sergej Sever'janov (1922) *Sinajskaja psaltyr'.* Petrograd: Izd. Otdelenija russkago jazyka i slovesnosti rossijskoj akademii nauk. （引用は Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt. 1954 による）

LXX: Septuaginta. Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes. vol.1, 2. (ed.) Alfred Rahlfs. © 1935 Stuttgart: Deutsche Bibelstiftung.

GNT: The Greek New Testament. (Edited by Kurt Aland, Matthew Black, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger, and Allen Wikgren in cooperation with the Institute for New Testament Textual Research, Münster/Westphalia), Third Edition. © 1966, 1968, 1975. United Bible Societies.

Tolk.Apost.1220., Tolst.Apost.: Voskresenskij, G. (1892-1908) *Drevneslavjanskij Apostolъ,* vyp. 1, *Poslanie kъ Rimljanamъ.* Moskva i Sergievъ Posadъ. 1982; vyp.2. *Poslanije svjatago apostola Pavla kъ Korinfjanamъ I-e.* Svjato-Troickaja Sergieva Lavra. 1906; vyp.3, 4, 5. *Poslanija svjatago apostola Pavla kъ Korinfjanamъ II-e, kъ Galatamъ i kъ Efesjanamъ.* Sergievъ Posadъ. 1908.

参照文献

Alekseev, A. A. (1999) *Tekstologija slavjanskoj Biblii.* S.-Peterburg: Izd. Dmitrij Bulanin.

Brandъ, Romanъ (1894-1901) "Grigorovičevъ parimejnikъ. Vъ sličenii sъ drugimi parimejnikami, vyp.1." *Čtenija v Imperatorskom Obščestve Istorii i Drevnostej Rossijskich*, 1894, kn.1, i-iv + 1-90; vyp.2. *Čtenija v Imperatorskom Obščestve Istorii i Drevnostej Rossijskich*, 1894, kn.3, i-ii+91-178; vyp.2 *Čtenija v Imperatorskom Obščestve Istorii i Drevnostej Rossijskich*, 1900, kn.2, 179-290; vyp.3. *Čtenija v Imperatorskom Obščestve Istorii i Drevnostej Rossijskich*, 1901, kn.2, 291-308.

Danilevskij, Igor' N. (1993) "Biblija i povest' vremennych let (K prob-

leme interpretacii letopisnych tekstov).” *Otečestvennaja Istorija,* 1993-1. 78-94.

國本哲男他訳 (1987)『**ロシア原初年代記**』**名古屋大学出版会**.

Lichačev, D. S. (1996) *Povest’ vremennych let* (Podgotovka teksta, perevod, stat’i i kommentarii D. S. Lichačeva, pod redakciej V. P. Adrianovoj-Peretc, izd. 2. ispravlennoe i dopolnennoe) S.-Peterburg: Nauka.

メツガー、ブルース・ M. (1983)『**新約聖書の本文研究**』（**橋本滋男訳、改訂第** 2 **版**）**東京：聖文社**.

Mouchard, Florent (2003) “Les citations scripturaires dans la Chronique Hypatienne.” *Revue des études slaves,* LXXIV/2-3 (2002-2003). 419-429.

Raba, Joel (1992) “The Biblical tradition in the Old Russian chronicles.” *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte*, 46. 9-20.

佐藤昭裕(1992)「**古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の研究―その言語とテクストの構造―**」『**京都大学文学部研究紀要**』31. 231-312.

Sato, Akihiro (1993) “Struktura povestvovanija i tekstoobrazujuščie sredstva v “Povesti vremennych let” i “Novgorodskoj pervoj letopisi.” In: *Comparative Studies in Slavic Lanugages and Literatures: Japanese Contributions to the 11th International Congress of Slavists.* 13-39.

_____ (2003) “Citaty iz Biblii v «Povesti vremennych let».” *Comparative Studies in Slavic Languages and Literatures: Japanese Contributions to the 13th International Congress of Slavists.* 5-38.

Sielicki, Franciszek (1968) *Powieść minionych lat.* Wrocław-Warszawa-Kraków: Zakład Narodowy im. Ossolińskich.

_____ (1984) “Biblia w najstarszej kronice ruskiej Powieść minionych lat.” *Zeszyty Naukowe KUL,* 27-4. 3-12.

Šachmatov, Aleksej (1908) *Razyskanija o drevnějšichъ russkichъ lětopisnychъ svodachъ.* S.-Peterburgъ: Tipografija M. A. Aleksandrova.（**引用は** Russian Reprint Series LIX, The Hague: Europe Printing. 1968 **刊のリプリント版による**）

_____ (1916) *Pověst’ vremennychъ lětъ.* t.1 *Vvodnaja častъ. Tekstъ.*

Priměčanija. Petrograd: Tipografija A. V. Orlova.（引用は Slavistic Printings and Reprintings 98. The Hague-Paris: Mouton 1969 刊のリプリント版による）

_____ (1940) “«Povest’ vremennych let» i ee istočniki.” *Trudy Otdela Drevnerusskoj Literatury,* 4. 9-150.

（京都大学大学院文学研究科教授）